

虎
公
後
編

說
29

佐藤紅線齋

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



特 231
123



虎
公

佐藤紅綠著



虎公後篇

佐藤紅緑

歡喜

一

宅平の病氣は輕くもならず重くもならなかつた。虎吉とお秀が口を酸くして同居を勧めたけれども肯かない。「私の家で私は死にたい」彼は毎も慙う言た。

「辨當でも握飯でも何でも好いから届けてくれさへすれば好い、私は一人で居たい、我儘だが勘辨してくれ」

二人は遂に争はなかつた。「あゝしてお八重ちゃんのことを想うて居たいのよ屹

度」とお秀は眼を濡ました。

病人とは言ひながら寝て食ふだけでは勿體ないと宅平は氣の向いた時に古葉書で座蒲團を作つたり反古を小綱にして煙管筒や瓢などを作つた。賣れるものは賣つて凡てお秀に渡し座蒲團は無料宿泊所が出来たら宿泊人に敷かせるのだと言て居る。

「何時になつたら宿泊所が建てられるだらう」

お秀と虎吉は毎も語り合つた、お徳が長きくなる、宅平の食料や薬價が殖える、此の一二ヶ月の間に貯へ得たのは只た二十五圓である。

「なあおい」と虎吉は或夜お秀に言た。「お前と俺と何時まで恙うしてるんだらう」

「什麼して？」

「左官の三公の奴は恙う言ふんだ、早く祝言をして丁へとさ」

「あら厭だ」とお秀は一寸嫣然して

「あの人は私の顔を見ると何時でも私にも爾那事を言ふのよー」

「お前は何時が好いと思ふ？」

「何時だつて好いわ」

此頃は人に揶揄はれつけてるので恙ういふ話も平氣で出来る様になつた。

「だがねえおい、俺は考えたよ」

「何を？」

「俺はお前に惚れてるだらう」

「まあ厭だ」

「まあさ、本氣で言てるんだから其積で聞てくれ、俺はお前に惚れてる、そこでだね、お前も俺に惚れてるだらう、爾して見ると今此で夫婦になつて了つちや惜しいと思ふよ」

お秀は眞紅になつてくすくす笑を泳へて居る。

「笑つちや不可えや、俺も躰裁が悪いやな、處で俺は憊う思ふんだ、夫婦になつちまへば子が出来るだらう、爾すると逆も貯金なんて出来つこはありやしねえ、だからねえ秀ちやん、俺達は希望を遂げるまで祝言を延ばして置かうぢやねえか、宿泊所が出来たら其の祝と二人の祝言とを一緒にして其晩に目出度づくしで固めたら什麼に嬉しいだらう。其時にやお前淺虫からお嬢ちやんにも来て貰つてよ、文公も招んで景氣好くやらあね、え？爾ぢやねえか」
「えい爾しませう、だけれども其れは何時になるでせう」
「何時になつたつて可いや、其の積で働いてれば可んだ」
「其れも爾ね」

お秀の返事は何となく淋しさうであつた。其顔色を見て虎吉は半ば満足し半ば悲しかつた。一日も早く結婚したいと思つてる様なお秀の態度を見ると堪らなく嬉しい、だが自分の事業が何れの日成就するだらうと思ふと又た堪らなく悲しい

彼は事業と戀とを別々に離して考へる事が出来なくなつた。事業と戀！二つの、一つが失敗すると他の一つも失敗する。生命と靈と肉とを一點に集めて、乗るか反るかの運試しをなすべく彼は決心した。
五六日は同じ話が続いた。二人の眼は流石に熱烈な愛の炎に輝いて若き血が踊る事もあつた、けれども二人の自尊心は其れ以上に堅かつた。或日お秀はお徳を寢かし付て居た。と店の方に大きな聲が聞える。

「原田さん郵便……小包です」
包は油紙で確乎と包んで細長く八寸位のもので、表に原田虎吉殿と書き裏に京橋區出雲町八番地磯田平吉と書いてある。
「あら聞いた事のない人だ」
憊う思つてる處へ虎吉が歸つて來た。
「俺も知らねえ」と虎吉は言た。

到頭二人は開封した。幾重にも半紙で包んだ中から出たのは百圓紙幣十枚！
二人は吃驚して顔を見合はせた。

二

「千圓！」

「千圓！」

「什麼したんでせう」

「誰が送つたんだらう」

二人の顔は青くなり又た赤くなつた。而して再び紙幣を數へ返した。

「危の紙に何か書いてないか」

「何んにもないわ」

「差出人は？」

「出雲町八番地磯田平吉！」

「可しッ行て見やう」

虎吉は千圓の金を懐にして家を飛び出した。「何だつて此那に金を送つたんだらう、見ず知らずの人が大金を送るなんて狂人か、でなければ人達に相違ない。」

「これだけの金があつたらなあ」と彼は電車を降りた時言た。「宿泊所が建てられるんだ、而して困つた者を喜ばせる事が出来るんだ、爾なると秀ちやんと俺と：

……」

彼は微に自分の胸の鼓動を感じながら確乎と金包を懐に抑へて居た。

出雲町を尋ねても其れらしい家もない、一時間餘りもぐる／＼廻つて到頭交番

所へ訊いた。

「何の商賣か」と巡査は言た。

「知りません」

「商賣の無い家か」

「知りません」

「其れぢやお前の知らない人を尋ねるのか」と今一人の巡査は笑つた。

「知らないから尋ねるんで」

「一理あるな」と一人が笑つた時一人は膨れつ面をした。

「磯田といふ家は無いね」と一人は戸別簿をばたりと閉めて、「併し待てよ、此間

ベストのあつた家は、あれが磯田ぢやなかつたか」

「あゝ爾だ月のやとか言たね」

「爾だ、あれだ」

能く笑ふ巡査は交番の横に乗り出して途を教へて、れた。

「月の家て何ですか」

「藝妓家だ」

「はてな」

「此間ベストに罹つた玉治ちう藝妓はお前の身寄の者か」

「冗談ぢやねえ、私其那事は知りません」

虎吉は逃ぐる様に往來へ出た。幾度も通つた路を又もや曲ると藝者の名前を書いた軒燈が吾れ劣らじと顔を並べてる横町に月のやと書いた軒燈が見えた。格子戸があつて御神燈があり、下駄箱の蓋が一枚欠伸をして腰硝子の障子から中の方が見えるが人聲がしない。

「今日は」と低聲で言ふ返事がない。

「今日は……御免なさい……今日は」

四五度目で漸く聲がした。「あら源どんかい」

「今日は」

「源どんぢやないの？おや」

障子を開けたのは米啗に江戸櫻を張た背のひよろ長い髪の薄い三十恰好の女で

あつた。

「今日は」と不審さうに蹲んだ時、片手に観世絢と片手に長煙管を持つて居たのが解つた。

「磯田さんと仰やるのは此方で」

「えい、爾ですが、何方から」

「お金を小包で送つて下さつたのは此方で？」

「お金を？」と女は益々驚く。

「へえ、千圓の金を」

「なに千圓？」

「此通り小包で送つて下さいましたんでお志は有難たうございますが、什麼いふ譯で送つて下さつたか其の譯を聞かない中は戴けませんで」

「千圓？」と女は眼を圓くしたが同時に虎吉の出した紙包を見るや否や「ぎやッ」と悲鳴を擧げて奥へ走り出した。

「唯れか来てくれ、狂人がお紙幣を持って暴れ込んで来たよ」

三

聴てどたんばたん音がして襖の隙間から種々な女の顔が出る。出たかと思ふと

直ぐ引込んで次の顔と代る。

「掛り合になると大變だから早く歸つてお貰ひよ」と奥の方から誰やらが怒鳴る
實際職人體の男が突然に藝者家へ飛込んで来て、懐から千圓の金を取出すのを見
たら、本氣の沙汰と思ふ者は一人もあるまい。

押問答の末到頭人違である事が解つた。磯田は磯田だが平吉でもなければ金を
送つた當人でもない、虎吉は這々の體で家へ歸つた。

「什麼しても解らねえ」と彼は落膽してお秀に言た。

「千圓といふ金は小さい金ではありませんからね」

「何かの間違だらう、警察へ届けやうか」

「でも名宛は此方なんですからね」

「其れも爾だな」

二人は無言で考へ初めた、と此時二人の視線が確と出會した。

「若しや」

「お八重ちゃんか」

お秀の顔は見る／＼蒼白になつた。

「屹度さうだわ」

「うむ」

虎吉は腕を拱むだまゝ動かぬ。

「何處に居るんでせう」

「此那大金を送る様では……」

「では浦島へでも……」

「豈夫あんな華族の處へなんか」

「ぢや若しや身體を賣たのではないでせうか」

「うむ」

「藝妓でなければ外國行の婦：…萬一したら田舎の酌婦：…新聞に能くあるわ」
「どんな處へ行つたか知らないけれども、若し爾だつたら、爾だつたら貴方：…」
とお秀は急に歎歎りあげた。「お八重ちゃんを其那にしたのは私です、私ですわ、私濟みません〜」

「俺も濟まないな」と虎吉も涙聲で言た。其處へ宅平がえつちらおつちら杖を突きながら入つて來た。二人の話を聞て宅平は皺深い眼を閉ちながら齒のない口を吃と結んで居たが聽て眼頭から一滴の涙がぼとりと落ちた。

「お前達は是が娘が送つたんだと思つてくれるのか」

「えい爾ですとも、お八重ちゃんより他には誰も：…小父さんは什麼思つて？」

「私も爾思ふ」恚う言た時宅平の涙と涕洟が一度に膝に垂れた。慌たしく四角に折た新聞紙で其れを拭き仍且眼を閉つたまゝ、「私も爾思ふ」と繰返した聲は顫へて居た。

「何處に居るんでせう」

「何處に居たつて構やせん」

「此のお金を送るには随分苦勞なすつたんでせうね」

お秀は正體なく泣沈む。

「能くやつてくれた、虎公、お八重を褒めてやつてくれ、彼奴あ仍且私の娘だ、

恩知らずぢやなかつた」

「濟まない事をしましたな」と虎吉は頭を撈つて。「此の金の中にやお八重ちゃんの血と涙が粘いてるんだ」

「褒めてやつてくれ」と宅平は又も繰返した、而して三人の無言の中に此金を送るに就てのお八重の苦勞を想うた。

藝妓か酌婦か外國行の醜業婦か、賤しい白粉臭い姿をして涙くんで此の音羽の方を望みながら悄然と立てるお八重を歴々と想ひ浮べる。

「一返で可いから會ひたいわ」とお秀が言ふ。

「馬鹿な事を」と宅平は打消して扱て急に膝を改ためた。

「なあ虎公、此の金はお八重が送つたものにして、又爾でないにして、是は天からの授かりものだ、お前が一生懸命に心掛けて居た無料宿泊所への寄附に違ひない、何卒一日も早く家を建て、お前の希望を遂げて貰ひたい」

「其れや不可ません」と虎吉は向直つた。

「何故だ」

「是はお八重ちゃん的身體に替へた金だ、一文だつて私の仕事に使つちや濟まねえ事です、是はね貴方にお返しするのが當然です、なあ秀ちゃん、是で以て小父さん入院して早く癒つて貰はうぢやねえか」

「えい爾ですとも」

「其れが當然だとも」と虎吉は猶ほも急ぎ込んだ。「縦令お八重ちゃんの金でないとしても何より先に小父さんを癒してあげなきや氣が濟まねえ、ねえ小父さん、これで入院して下さい、お八重ちゃんの志です」

宅平は靜に頭を掉た。「いや爾ぢやない、私の娘は其那心持で送つたのぢやない」

「いゝえ彼那に孝行なんですもの」

「お前達はお八重の心を知らないんだ、虎公お秀さん、お八重はもう些と考のある女だよ、此の金は私の養老金でもなければ入院料でもない、其那事に使はうも

のなら彼奴は什麼に落膽するだらう、什麼に私を恨むだらう、どうかお八重の志を無にしてくれるな、なあ虎公、之はお前の宿泊所への寄附だ、虎さんが彼那に思つてるんだから什麼事でもお金を作へてあげたいと彼奴は毎晩の様に言て居た、家を飛出したのも詰りは金と身體とを替たのだ、其れといふのはお前の事業を助けたいからぢやないか、私は彼奴の親だ、彼奴の心を知てるものは私が一番だ、お前の女房になれないからというて心の苦しさ許に家を飛出したのではなといふ事が今初めて解つた、是で私も安心した、漸く恩返しの一端が出来たといふものだ、なあ虎公お秀さん、お八重の金が基になつて宿泊所が出来たらお八重一人の身體が何百人何千人の生命の親になる、私の口から言ふのも可笑しいが其れだけに尊いお八重の志を私一人のために煙にしてしまつたら、私ばかりぢやないお前達もお八重を犬死させる様なものぢやないか、其處の處を能く考へて見てくれ」

「全くだ」と虎吉は兩眼に涙を湛めて言た。「俺達は仕事があるんだ、此の仕事は俺だけの仕事ぢやねえ、お八重ぢやんも發起人の一人になる譯だ」

「其れだ、お八重はお前の爲に身體を賣る、其の金が天下の利益になる、若し宿泊所が出来たら其れがお前一人の女が一人の男に惚れた凝形とも言へやう、なあ虎公偶には彼女を可愛いと思つてやつてくれ、其れだけの事をな、其れだけの事を私が頼む」

暗然と涙に暮れた宅平は又た續ける。「可愛と思ふならお秀さんを可愛がつてやつてくれ、お秀さんはお八重に代つて私の娘になつたんだからな」

「其那に俺を戀つてくれたのか」と虎吉は腕を拱んで遙にお八重を憶うた。

宅平の堅い決心は虎吉を動かした。お八重にしる誰にしる、此の志を無にし
てはならぬ。千圓の金があれば二十坪位の家を建て、猶ほ多少の維持費位は残る。
左官の三公に相談すると一も二もなく請合つた。木挽や大工、屋根屋までが友達
同士の懸値なしで早速工事に取掛つた。

場所は虎吉の直ぐ隣で紙漉小屋であつたのを取毀して其處に普請小屋が立つ、
地盛をする、柱立の日には虎吉自から幣を取つて四方を拜んだ。

朝には眼覺めると直ぐにお徳を抱いて工事場を一周する、河岸から歸つて得意
先を廻り終ると直ぐに又た其處へ駆け込んで、職人共の働くのを見たり、自分自
身手傳つたりする、兩手を拱んで日々形をなし行く家を兎角眺めて居る時は彼
の最も得意の時、手斧の音、鋸の音、鐵槌の音と鼻唄の聲、馬の聲などが混亂

になつて初夏の晴やかな天に漲ると、若い職人共が皆が景氣の好い顔をして面白
さうに動いて居る。

「難有てえ事だ」

彼は歡喜の涙が充滿になつた根を瞬たく。

「難有てえ事だ、俺もこれで男になれるんだ、恚うして皆なが動いてくれるのも俺
の考へた事は眞面目の事だからだ、これが曲がつた事をするのなら此那に皆なが
威勢よくやつてくれねえんだ、其れといふのもお八重ちゃんのお蔭だ」

彼は事業の抄取るのを見ると共に是がために犠牲となつたお八重を憶はずにや
居られない。警察にも頼み探偵社にも頼みお八重の行方を探したが一向手掛りが
ない。何處へ行たんだらうと繰返して居る中に工事がどん／＼進んだ。工事が
進むと共に宅平は不自由な身體を杖で支へて毎日やつて来る。

「早く看板を上な、景氣好く無料宿泊所つて看板を掛けてくれ、而してお秀との

祝言を早く済ましてくれ」

宅平の催促を受ける度に虎吉の胸が跳つた。我が事業の成る時は即ち我が戀の遂げられる時である、肉と生命と血と靈の結合！ 全生涯中に黄金時代、歡喜と光榮の冠が我れを待てるかの様。

同じ心にお秀も獨り笑ひつ獨り泣きつした。彼女の深い淵の様な眼色は段々に浮き立て來た。「おい丸鬚の癖を付て置ねえと不可えぜ」と三公に揶揄はれる度に彼女は今更ら處女らしく顔を赧らめる、六月の中頃と日日が決まるに付けても彼女の胸は奇妙に騒立つた、其れは長次と結婚當時には少しも感じなかつた嬉しさと羞かしさと入交つた擦ぐつたい様な心持であつた。夜中に眼を覺すとお徳が小さな手を自分の乳房に置てすやくと眠つて居る。彼女は窃と其頬を胸に引寄せて小聲に言ふ。

「小父さんが直き御父様になるんだよ」

若し嬰兒が人の言葉を了解し得る力があるなら、お徳は屹度恚う言ふだらう。

「母さんは同じ事を一日に何十返言ふんだらう」

稀には三公に揶揄れたさに故意を普請場へ出掛ける事がある。爾かと思ふと虎吉と眼を見交はす時に急に俯首れて物が言へなくなる時もある。遠くから嫣然すると虎吉もにや／＼する、恚ういふ時は背中に春日を浴びた様に和らかで暖かい氣持になる。

彼女は畢竟處女に立復つたのであつた。

宅平が筆を振つた無料宿泊所と書いた看板は墨痕淋漓として路行く人の眼を惹いた。其と同時に虎吉とお秀の祝言が執行なはれた。媒介役の三公夫婦を初めとして八百屋鐵葉屋植木屋大工左官に町内の頭、約三十人許の友達が手ん手に酒や肴を持參の大宴會で唄ふやら踊るやら近所の迷惑も構はず夜更まで飲み續けて歸つた後は五月の薄霧が仄かに二十日餘りの月を包んで町が淡い夢の様に静まつて居た。

其夜の事は忘れられぬ、お秀に取て一生の嬉しい時であつた。朝、毎もより早く起きて竈の下を焚き付けながら凝と考へると何とはなしに弗と顔の赤らむ思がする、爾いふ中に只だ理由の解らぬ嬉しさが海綿の様に胸に擴がり出して唇が自然に馳むと顔中に笑が濺ひ出すと、又た直ぐ耻かしさが充滿になる。

焚付をばきりと折て二つに重ね、燐寸を摺らうと手に取る中に、其の手は何時しか留守になつて黙考は同じ處へ逆戻りする。

「私は什麼して憊う幸福なんだらう」

彼女は繰返し「我身の幸福を祝した、而して此の幸福は殆んど豫期しなかつたにも拘らず憊うなつて見ると是れより以上の幸福が續々と湧いて来る様に思はれた。是れより以上と言ても幸福の分量が増すといふ事ではなく只が虎さんと夫婦になつたのだといふ心持が段々に確かまつて来るのが嬉しいのであつた、近所の人が何といふだらう、店へ出たら人が冷評かすだらう、三ちやんが擲擲に来るだらう。

「其れに今に起きたら坊やを抱てくれるだらう、今日から本當にお父さんになつて下さるんだ」

果しなき歡喜に酔うてお秀は何時までも竈の前を離れなかつた。其中に虎吉が起き出した。彼は銅盥を提けて水道口へ行た時にお秀の横顔をちらりと見て黙つて顔を洗つた。毎もなら二言三言話すのだが今朝は什麼しても聲が出ない。と彼

は突然

「は、は、は」と笑ひ出した。

「什麼なすつて？」とお秀も初めて口を利いた。

「何だか變だな」

「何がですか？」

「俺の體裁が悪いや」

二人は顔を見合はさぬ様にして笑つた。

「だがねえおい」と虎吉は少し度胸が坐つて。

「俺あ變挺だな、今日からお前を何と呼ぼうか」

「何とでも……」

「嬬といふのは不可えな」

「どうして」

「少し失敬の様に聞えるぜ、矢張秀ちゃんが良いや」

「どつちでも貴方のお好な様に」

恚う言てる中に虎吉の姿が見えなくなつた、と霎時して歸つて來た。

「あら何處へ行たの？」

「小父さん許へ行て來たよ、小父さんはもう起きて居たよ、其れでね身體の工合

が大分快いから今日から宿泊所の監督兼書記てえな事をやらして貰ひたいと言ふ

んだ、其の方が氣が紛れて可からうちやないか」

「其れも爾ね」

二人は膳に就いた、今までとは違つて同じ井に箸を入れる時も、互の視線が逢

着する時も、虎吉の給仕をする茶碗の持方までが凡て二人の間に深い意味が出來

て而して其れが全然今までとは別種の心持になつて二人の胸を和らかい春の光に

包んだ。

不可思議な男女の關係である。互に愛し互に信じ、何も彼も捧げ合つて心と心が溶けて流れて一つの坩堝の中に渦巻いてる様に思つてゐる人達でも、夫婦に爲つた後と、夫婦に爲らぬ前とは何處かに大きな差異がある。其の差ふ點は何であるか、是まで虎吉とお秀が相思相愛の中であり且つは殆んど夫婦の様に同棲の中でありながら、其れでも二人は此の「差異つた點」に頗るまごついた。まごついて而してもつと大なる幸福が二人の行手に待てる様な氣がした。

先づ河岸から歸つて見ると火鉢や鐵瓶を綺麗に拭いて嫣然して待つ居るのは今

までのお秀ちゃんでなく我が妻のお秀である。「これが俺の所有だ」といふ氣が確乎と心に刻まれるともう過去の事は一切忘れて現在我が眼の前に坐つてゐる可愛い姿だけが頭に充ちて居る、其れと同じくお秀も最早何の遠慮もなくなつた、深く考へたら小さな不安や過去の暗い影がちらちらしない譯でもないが、其れよりも彼女の胸底にとつしりとした安心の錨が下された。「虎さんは私も良人だ」

人生の春！而も多年の宿望たる宿泊所が建てられた。恁ういふ幸福が又と得られるであらうか。

宿泊所には二人三人の宿泊者があつた、お秀は賄方をやる、宅平は事務を執る、虎吉は數倍の勇氣を以て働き續ける、彼もお秀も店の忙しさに逐はれて宿泊所へ行く事は稀であつた。併し毎日宅平の報告を聞く、又た昨日綿の如く疲れて來たものが今日になつて職業を探しに出掛けたとか、職業に有り付いて御禮に來たとか、初めて病み衰へた身體を蒲團に横たへた時に家根の下で死ぬるのが難有いと

言て涙を零した乞食の事などを聞く毎に虎吉も涙を流して喜んだ。

「其奴あ什麼に嬉しかつたらうな」

彼は自分の過去を思つては又た涙を流す、而して彼は此の涙と共に益勇氣が加はつた。

「何といふ立派な人なんだらう」

お秀の虎吉を尊敬する念が益加はつて来た。彼女は憊ういふ男を良人に持たといふ果報を自分自から不思議に思はずには居られなかつた。此頃からして彼女は大日様や荒神様や不動様などを念じ初めた。

或夜お秀は神棚や荒神棚の供物やお神酒徳利や注連や御神符や御幣、種々なものを買て来て綺麗に磨き立て、棚に納め、燈明を捧げて一心に拜んで居た。

「驚ろいたね」と虎吉は背後から聲を掛けた。

「あら何を？」とお秀は祈禱を済まして虎吉の方へ向く。

何をつてお前、お前は神信心になつたね」

「えい」

「神様や佛様が難有えのか」

「えい、私達が憊うなつたのも神様のお蔭ですわ」

「全くだ」と虎吉は感心して「全く神様が護つて下さらなきや憊那になりやしねえな」

虎吉も坐り直して神棚を拜んだ。其れは極めて嚴肅な而して自分等の幸福を何物か絶対な力のあるものに託して置きたいといふ敬虔な心持であつた。

と、此時宿泊所の方から騒々しい物音が聞えた。

「喧嘩をしてる様ですわ」

「なに、小父さんが居るから大丈夫だ、稀にや男の事だから喧嘩をする事もある

」

喧嘩の音は直に止んだ。お秀は此時何といふ事なしに胸騒ぎがした。

八

世の中には慈善家といふ商賣人がある、慈善といふ字を看板にして單に虚飾の道具に使ふ。其れと共に一方に又た慈善家の弱みに付け込んで巧に自分を利する横着者が出て来る。縁日の乞食に環視の前で一圓の紙幣を恵んでやる慈善家先生があると同時に、他人の子供を借りて来て地べたに寝かして衰れな聲を出す専門家もある。

無料宿泊所は虎吉が生命を賭して建てたものであるが、其處へ来る漂浪者は悉

く虎吉の様な心掛のものばかりではなかつた、東西に流れ渡つてる中に品性が摩滅して食を得る爲には随分卑しむべき手段を選ばない程其れ程狡猾な人間に墮落しきつて居るものもある。一日ロハで宿めて貰つて食はして貰つて其れで去り際にバケツを盗んで行くものもある、他人の下駄を故意と穿き違へて行くものもある、辨當のお菜や煙草一服の貸借で喧嘩をするものもある、弱い者に喧嘩を吹掛けて多少でも強請るものもある。其等を見る毎に虎吉は歎息した。

「根性の腐つた奴は何だしたつて癒りやしない、片端から打ち殺してやる方が可い」と宅平は言ふ。

「いや待て下さい、數の中にや爾いふ悪い奴もある代りに本當に善人になりたがつてる人もあるでせうから」と虎吉は宥める。

今日も何やら喧嘩があつた様だとお秀は其事を氣にしながら虎吉が外出した後で臺所を片付けた、日はとつぷりと暮れて裏の高臺の木立の上に薄すりとした三

日月が掛つて居る。手桶を提げて裏の井戸の方へ出ると、初夏の木々の若葉の匂地の底から暗を蒸し騰るいされの微かな氳氣、町の往來を行く車の響、かさくと葉屑を動かして行く仄暖い風、凡てが夏を待つ大自然の静な夜の心持であつた。此邊は水の湧が強く、一間も掘ると水が勢よく噴き出す。淀みなく静かに井戸端を溢るゝ水を見詰めながらお秀は何時の間にか我身の上を回顧した。もう心が燃え立つ程嬉しさの境遇にありながら折り／＼彼女を悲しい様な不安に引戻すものがあつた。其れは何であるか自分解らない、で毎も其度毎に彼女は恚う解決した。

「餘まり果報過ぎるから勿體ないので其れで恚う心配なんだわ」

どうかすると恚うも思ふ。

「私が本當の處女で虎さん許へ來たのなら什麼に嬉しいだらう」

手杓を取上げたが汲まうともせず、長い間其那事を想ひ續けて、結果は仍且自

分ほど幸福なものは此の世界にないといふ事になり、其處で安心して鬚を拂ひ上げ、嫣然して水を汲み初めた。

と此時背後に人の足音がする、振り返ると見慣れぬ人影、カーキ色の兵隊外套を裡の上に着て繩の様な細紐を締め、帽子なしの頭の髪は馬の刷毛の様に荒く立て居る。

「御新造さん實に濟ませんが……」

「私？」とお秀は立止まつた。

「えい、手前は其の此方の御厄介になつてるもんですが、先刻程辨當を合部屋の奴に盗まれましたんで……文句を言たら散々撲られて此通り鼻血が出るほど……何しろお辨當を盗られちゃ腹が空つてやりきれませんから、何卒其のお握飯でも可うございますから」

「まあお氣の毒ですわね、其れちや私の宅の方へ來て食つて下さいね」

「どうも済みません」

男はびよこしく頭を下げてお秀の前に近寄た。と思ふと男の手が早くもお秀の帯と胸元の間に掛つた。

「何をしますんです」

「お秀！俺だよ、長次だよ」

「えつ」とお秀は背後に反りかへる様に二三歩たろいて疑と男を見詰めた。顔は瘠せて泥の如く汚なく、加之に左の眼が潰れて、鋭どく光る右の一眼、變るは變つたが紛れもない先夫の長次である。

九

長次！長次！お秀の運命を悪魔の眼の如く日毎毎に睨んで居たのは此の長次であつた。お秀は全身凍て付いた如く立竦んだ。

「ねえ御新造さん、大したもんだね、亭主の友達を情夫に殺さしてさ、澄まして夫婦になるなんて全く凄腕だよ」と長次は片目を小さくして笑つた。

「貴方は〜貴方は」とお秀は漸く口を開いたが其の聲は殆んど聞取れなかつた。「貴方は生きて居たのですか」

生きて居たのですかといふ短かい言葉の中に此の一年間血を吐く様な彼女の苦悶が籠つて居る。

「生憎と生きて居たよ」と長次は又もや笑つた。「生きて居ると言やあまあ生きて居る様なものだがね、死んでると言やあ死んで居る様なものさ、だが此處で會ふとは

思はなかつたよ、無料宿泊所が虎公が建てたんで其の嬢はお前だと猶更ら思はなかつたよ、生きて居れや種々な珍しい物を見るもんだね、ねえおい爾ぢやねえか、お臺場の沖で打撲られてよ、正氣が付いた時にやもう眇目になつてよ、其れから馬關くんだりまで彷徨いてよ、矢張生きて居るから東京へ逆戻りしてよ、とうとう無料宿泊所だ、えいおい虎公は巧え事を考へてくれたもんだね、俺を態々此處へ呼んだ様なものだよ、慈善のお蔭だ、全くだ、無断で人の嬢を盗りやつて其の埋合せに無料で人を宿めてやるなんてのは中々智者だ、えいおいお前が惚れるのも無理が無えや」

「あゝ〜」とお秀は歎息した。「私什麼したら可いだらう」

「什麼したら？」と長次は問答めた。

「仍且虎的と夫婦になつて居るが可いちやないか、仲の好い處を俺見物してやらあね、なあおい、俺は死ぬまで此處で厄介になつて居るよ、無料宿泊所だから一文だ

つて要らねえだらう、無論一文だつて取りやしめえ、俺は自分の嬢を無料で貸してやるんだから」

「私は貴方の女房ではありません」とお秀は屹と言放つた。

「おい御冗戯を仰やつては不可せんよ、俺はお前の御父さんの養子に入つたんだ」

「でも籍が入れてありません」

「籍が？籍なんて什麼でも可いや、嬢は嬢だ、亭主は亭主だ、おい腹の子は什麼した」

「生きて居ます、立派に育つて居ます、貴方の世話にやなりません」

「感心〜、俺の世話にならうたつて俺の方で御免蒙るよ」

「什麼〜それや可いと言ふの」とお秀は自烈たさうに言た。

「其れは俺の方で聞く言葉だよ、ねえ御新造さん、早い話はね、俺だつて男だ、嬢を取られて半殺にされて黙つて居る譯にや行かねえ」

「それで什麼するの？」

「復讐をしてやるんだよ」

「復讐？」とお秀は聞答めて長次の眼を凝と見返した。

「えい、して貰ひませう、私を殺して貰ひませう」

「じよく冗戯ぢやねえ、お前を殺したら狂言はお終だ、俺は其那手荒な事をし

ねえよ、只だほんの一寸だけね」

「何をするの？」

「其れは言はれねえ」

+

「言て下さい、いゝ什麼な復讐でも受けるわ、虎さんに迷惑が掛らない事なら」とお秀は言た。

「惚れてるね」と長次は唸つた。

「私を殺して下さい、貴方の氣の済む様に」

「惚れてるね」

「貴方は虎さんが貴方の爲めに苦勞をした恩や、お徳を育てゝくれた恩を何とも思はないんですか」

「惚れてるね」

「恩を知らないのは餘まりです、其れや貴方の様な人は恩や義理を知つてる筈はありませんけれども……」

「爾とも、半殺しにされてさ、不具にされてさ、嬖を盗まれてさ、其れが恩なら俺は恩知らずだよ」

「勝手になさい」とお秀は決心の唇を結んで長次を睨んだ。

「俺が恐いのか」と長次は笑ふ。

「恐い事があるものですか」とお秀は最早怯びれた體もない。「生命を抛げ出しさへすれば世の中に恐い事はないわ、さあ虎さんに會て下さい、虎さんと私とは夫婦です、夫婦二人で恩知らずの復讐を受けませう、虎さんは貴方を殺したと許り思つて居るんだから、其のために毎日／＼苦しんで居ます、貴方が生きてる事が解つたら什麼に安心するでせう、えい爾です、虎さんは罪も何にもない明るい身體になるんです、さあ虎さんに會て下さい」

秀子の心は歡喜に跳つた、彼女の胸の中は虎吉を一刻も早く安心させたいといふ事に充滿になつた。

「待てくれ」と長次は尻込をして考へた。「虎的は俺を殺したと思つて居る……毎日其れで苦しんで居る、其れや本當か」

「えい」

「本當か」

「貴方の様な悪徒なら人殺し位は何とも思はないでせう」

「うむ、其れぢや會ふのは止さう」

「何故ですか」

「いつまでも苦しませてやるんだ、其れが一番好い復讐だ」

「何ですつて？」今度はお秀が慌てだした。

「何時迄も苦しめますんですつて？」

霎時途切れて再び「やえ／＼」と叫んだ。「貴方が會はなくなつて私が言ひます」「成程」と長次は其處らの材木に腰を下した。

「お前はたしか虎的に惚れてるんだつてね、いえさ何時までも夫婦になつて居たいんだらう？」

「無論ですとも」

「處でだね、俺が生きてるてえ事を虎的に言ひつけると虎的には確に安心するだらうさ、其の代りにお前は虎的に逐ん出されるぜ」

「何故ですか」

「死んだと思つた前の亭主が生返つたらお前と虎的には姦通ぢやねえか」

「あつ」と聲を立てたがお秀は何にも言へなかつた。いかにも先夫が生きてるのに二重の結婚は不義である。心の底には自己の正理を認めつゝも何といふ事なしに自分は不義であるまいかといふ疑ひも出て來た。……縦令戸籍に入つて居ないとしても……良人は良人たる権利を捨てたとしても……虎さんの氣象では屹度私を離縁する。

石像の如く立盡して居るお秀を見やつて長次は冷やかに笑つた。

「ねえおい、虎公にや言へまい、だから俺は好い様にしてやる、俺はな今から他所へ行かう、虎的に生涯苦しましてやるんだがお前の爲にや俺が居ねえ方が可いだらう、なあおい惚れてる男に添はしてやるんだよ、難有い亭主もあつたもんな、だが他行へ行くには足が要るからな」

「お金？」

「爾よ」

「私に出せといふの？」

「まあ爾だ、嬪の身代金を嬪から取るつて譯さね」

「お金はありません」

「ない？」

「えい、一文も」

「金が無くたつて何かあるだらう」と長次は立上つた。

「虎さんに断わらなければ前掛一筋でも自由には出来ません」

「成程ね」と長次はぐる／＼廻りながら。「まあ可いや、出来ないものは仕方が無いさ、だがお前明日の朝まで考えて見い」

嚇かし文句を並べるかと思ひの外、長次は眇目を細くしてにや／＼と笑つたまま其處を立去た。

後を見送りもせずお秀は手桶を提げて家へ歸ると虎吉は未だ歸つて居ない、お徳が一人寝轉んだま／＼ぶう／＼泡を吹いて居た。

お秀は吻と息を吐いた、而して物の半時間も身動もせず居たが、不圖立上がつて筆筒の中から一枚の着物を取り出し其の中に幾枚かの紙幣と銀貨を挟んで勝手口へ出た。

奇しき戀

「あら若様、其那にお切り遊ばして何に遊ばすのでございます」と女中のお覺が頓狂聲で叫んだ。

「うむ是か、是はね僕の奥様に進げる花束を作るんだよ」

廣庭の泉水の邊に並び立てた數百株の牡丹は紅白紫黄相亂れて今を盛りに咲いて居る、其れは來るべき子爵誕生祝の爲に諸方より蒐めたもので、見渡す處只だ一面の錦、其の莊嚴な花の眞上をちり／＼と照す六月の日光は恰がらに花の葉を穿つて底深く生長の力を注ぎ込むかの様、而して凡ての花は一様に胸を擴げて

日に向つて何物かを語つてるかの様、初夏の活々とした力は静かな青天と赫とした花園との間に溢れて居る。時には池に細い漣波が起つて睡蓮の葉が水に粘着いた儘一寸動き出すと、陸の牡丹がぼたりくと一片づゝ重さうに散る。風といつても蝶々の呼吸位な極めて静かな正午である。其の牡丹の中に剪刀の音が聞える。ちよきんく、切ては腕に抱へ、切ては腕に抱へる。

「あら大變でございますよ、皆なお切遊ばしては」

「構はんよ、可いよ」

途方に暮たお覺に目も呉れず、剪刀の音が益々繁くなりかけた時、お八重の姿が見えた。

「あら若様御止し遊ばせ」

漸く覺えかけた遊ばせ言葉を言憎さうに言てお八重は笑顔をして見せた。

「お前に花束を作つてやるんだよ」

「花束はもう結構でございますよ」

「併しデンマルクの王子はオフイリヤに花束を贈つたぞ、愛の象徴だ」

「花束はねえ若様」とお八重は困り抜いて「もつと小さな花でなけりや不可せん
のよ」

「あゝ爾だつたね、雛菊に莖に勿忘草……併し大きい方が好いな」

「でも私は……」

「嫌か」と稍々不機嫌になる。

「いゝえ若様」

「解つた〜」と正彦は急に快活になつた。

「オフイリヤは狂人になつたがお前は狂人でないから花束が要らないんだね」

お八重は黙つた。

「お自分こそ狂人の癖に」憊う言てお覺は其處を走り去た。

「失敬な奴だ」と正彦は怒り出した。「お八重僕は狂人ぢやないね」

「えい、其那事があるもんですか」

「併しなあお八重」と正彦は何に感じたか涙を充滿眼に溜めて凳に腰を下し、「なあお八重僕は萬一したら狂人かも知れないよ」

「えつ？何故でございますの？」

「僕は折々爾思ふ事があるよ、頭が悪くてね仕様がなないんだ」

「其那事がありや致しません、ねえ若様、貴方は八重を什麼お思ひ遊ばして？」

「お前をかへ」と正彦は疑とお八重の顔を見詰めて、「お前は僕の奥様だよ」

「其れ御覽遊ばせ」とお八重は悲しさうに笑つて見せた。「狂人には奥様がありませんわ」

「爾だ〜」と正彦は子供の様に手を拍た。

「僕はお前が可愛といふ事だけを知てれば其れで可いんだね」

「えい」と返事したものの、お八重は此時瞳を凝らして正彦の顔を見詰めた。正彦は猶ほ饒舌り續ける。

「ねえお八重、人が何と言つても構はないね、僕はお前を愛して居さへすりや可いんだ、爾だらう？其代りに僕をも愛してくれ」

「愛して居ますよ」とお八重は何氣なく言た。

「爾か」と少し首を傾げて、「いや愛して居ない」

「何故ですか？」

「お前はね、美しい衣服を着ないから」

「其れで？」

「其れからね、言葉をもう少し上等にしないから」

「……」

「其れからね、白粉を塗らないから」

お八重は黙つて地上を見詰めた、と彼女の眼から落る涙がぼたり／＼と足元を濡らした。

「若様―」と彼女は突如正彦の膝に手を置いた。「美しい着物を着ませう、言葉に氣を付けませう、白粉も塗けますわ」

「みんなやつてくれるか」と正彦は踊り上る様に勇み立た。

「はい、其れは私の義務でございますもの」

泣倒れやうとする手を確乎と握つて正彦は何時までも離さなかつた。

二

正彦とお八重は其處を去た。若楓の美しく爽々しい濃やかな影を印した穹門の様な路を過ぎると其處は一段と高い地になつて、母家からの廊下續き、老櫻や楓が圍繞いた一軒の離室がある。離室の南は開けて東の方に書院窓と濡縁がある、縁の端の天水鉢には漢竹の葉が婆娑と水を覗いて金糸雀が老い行く聲で淋しく囁つて居る。其れは夫人の幾代の居間である。

「お母さまジョンが不可い事よ、メリーさんを咬へて行くわ」

可愛い透徹る様な聲が楓の下蔭から聞える。

「叱つておやりなさいよ」と言た時書院窓が開いて、上品な束髪に結た幾代の淋しく優しい顔が現はれた。

「叱つ／＼、馬鹿／＼」といふ萬龜子の聲が聞えて、赤塗の小さな下駄を穿いた白い足と、長い友禪メリンスの袂が葉隠れに動く。幾代は靜に笑つて其れを眺めて居る。

「あら不可いわ、お母様」と言て直ぐに「何ですジョン」と叱る様に言ふ。

「ジョンや〜」と幾代が呼ぶと、大きなセッター種の犬が鐵砲玉の如く木蔭を走り出し口に咬へた西洋人形を縁の上に載せて、扱てぐる〜と其處らを廻り初めたが聽てびたりと停まつて稻荷様の様に坐り媚びる様な眼をして主人を見上げ耳を低れ鼻を向き上げてく〜と鼻を鳴らした。

「馬鹿ですねお前」と幾代は笑つた。此時飯事の道具や砂遊びの道具を胸の處まで積で漸と兩腕で支へた萬龜子の姿が見えた。色が白く髪が豊饒で漆の様に黒いのをお下髪に結て、瓜實顔が少し下膨れて丸顔に見える程ぼちや〜肥つてるのに、眼の涼しさ唇の紅さは母親に似て如何にも上品である。彼女は眼に充滿の涙を湛めて居た。

「什麼したの萬龜子さん」

「だつてジョンが餘まり酷いんですもの」

「巫山戯るんですよ」

「だつて、メリーさんが可愛さうだわ、お腹の處を咬へて振り廻すんですもの」
餘程口惜しかつたと見えて、長い袂を一振二振狗の脊中を打た。犬は一寸耳を窄めたが「なあに我輩を打つたつて痛くもないや」と言た風に泰然として欠伸をして其れから萬龜子を見やつた。「何ならもう少し巫山戯て御覽に入れませうか」とでも思つたのだらう。

男と差つて女の子は袂の先で脊中を擦つた位で懲罰が済んだ。人形を抱き上げて檢ためて見ると何處と言て傷んだ處もない、萬龜子は漸く氣が落付いて微笑に笑つた。

「おう好い子、可愛さうにね、眼が眩つたらう、いやなジョンですわね、メリーさんは泣かないわね」

頬摺をして幾度か顔を覗き込む其の様子を見て幾代は又々笑つた。彼女の樂み

といふものは萬龜子を相手に遊ぶ事のみであつた。萬止を得ざる要件の他は滅多に母家へは行かぬ、木立の間の離室に殆んど隠居同様になつて一心に手習を初めた、其の第一歩には婦女庭訓、大學、孝經、其れから萬葉集の拔萃、近頃は聖書を寫して居る。積り積つたら装幀して萬龜子に遺さうといふ意である。けれども彼女は決して悲しい顔を萬龜子には見せなかつた、時代後れの聲を出して唱歌も唄ふ、萬龜子と共に體操もする、隠れん坊や鬼ごつこもする、母家に遠き別天地で二人の笑聲は毎も絶えなかつた。

「お母さま鞆に御乗りにならない？」

「えい乗りませうか」

幾代も庭へ出た。此時幾代はちらと木立を見やつた。正彦とお八重が肩を並べて日光を浴びながら芝に腰を下して語つて居る。

三

幾代夫人は猶も二人の様子を見成つた。若楓の枝が二人の頭から肩を斜に日光を滑らして胸から下は暖かく日に照られて居る。何を語つたかお八重が笑つた、と正彦も他限なく笑ふ。正彦が笑つたのでお八重は又もや笑ふ。

「睦まじさうだ」と幾代は思つて直ぐに「お八重が能くお守をしてくれる」と思つた。とお八重は急に立上つて正彦の頭の上を袂で蔽うた。

「危なうございます、蜂がく蜂が」

殆んど我子を庇ふ母親の様に正彦を胸に抱き寄せて凝と飛廻る蜂を見詰める。幾代の眼に涙が滲み出した。何といふ親切なんだらう、狂人でも良人だと思へ

ばこそ彼れだけに親切にしてくれる、其れだのに此邸ではあの娘に何れだけの御禮をして居るだらうか。人並より美しい氣質と容色を以て生まれた娘を、人並よりすつと劣つた狂人の子の玩具にさして何とも思つて居らぬ。

幾代は羞耻しさに身を支へ兼ねて両手に顔を隠してすた／＼と戻りかけた。

「鞆轡をしませうよお母様」と萬龜子は鞆轡の綱を動かしながら言た。

「えい、お母様も乗りませうね」

「あら、御兄様が被居やるわ」

萬龜子は飛立つ様に手を拍て正彦を呼ぶ。

「お兄さま／＼」

「おう、萬龜さんか」と正彦はお八重と共に立上がつて歩み寄た。

「お兄さま御病氣が快いの？」

「うむ僕は病氣でないよ」

「ぢや何故私の處へ被來やらないの？お嫁さんが出來たから？」

「は／＼、」と正彦は笑つた、お八重も笑つた。

「萬龜さん、僕のお嫁さんは美いだらう」

「えい、綺麗で可いわ」

萬龜子は涼しい眼を瞞つて羞かむお八重の方に臆面もなく近寄つた。

「ねえお嫁さん、飯事をしませうね、ジョンが居ると煩さいから誰かに繫いで貰つてね、其れからね私嬉しいわ、算術の宿題を教へて頂戴ね、毎日被來つて頂戴ね、貴方金絲雀がお好き、お好なら進げますわ、ねえお嫁さん、其れからね私ね毛糸で何か編めるのよ、來年になつたら肩掛を編んであげますわ、ねえ何かして遊びませうよ」

「其那に煩さくするもんぢやありませんよ」と幾代は優しい眼をお八重に向けて「お嫁さん／＼つて變ですわね」

「お嫁さんと言ては不可いのか？其れぢや何と言ふの？」

「お姉様とお言ひなさい」

「お姉様？」と萬龜子は不思議さうに考がへ込んで眼をばくりさせたが、顔中が崩れる様に笑ひ、「爾々爾々ですわねえ、お兄さまのお嫁だから御姉様なんですわねえ」

「いゝえ勿體なうございます、八重とお呼び遊ばして下さいまし」とお八重は面伏さうに言た。

「いゝえ爾ぢやありません、貴方は私の嫁です、私の嫁になつて下さい、どうせ貴方の身體は此の浦島家で疵物にしたのですから、其の罪滅ぼしにでも貴方を嫁と呼び姑と呼ばなければ私の氣が濟みません、其れでなかつたら八重子さん、今日限り私は此の邸を出てしまひます、八重子さん、何卒〜何卒……」
頭が段々下に低れたかと思ふと、其儘幾代は地上に膝を突いてお八重の前に平

伏した。

四

廣い世界に誰一人同情してくれる者もなき身が、今幾代の口から理義ある優しい言葉を聞いてお八重の張り詰めた氣が急に弛み出した。

「まあ勿體なうございます、私などは詰らない身分でございますから……」

「身分とお言ですか」と幾代は面を正して屹と言た。「貴方も矢張私の心持が御解りでないと思えます、華族と平民と何處が違ひませう、私の口から憊う言ふとは人の理窟だけに聞えるでせうが、事實今の華族には家柄を自慢に自分ばかりが人

であるかの様に思つてゐる人もあります、けれども其れは一部分の人達だけで今ではねえお八重さん、華族を鼻に掛けて平民を侮どる様な人は幾何もありません、平民の方では猜み妬みから華族を敵の様に思ふ様ですが其れは大變な間違ですよ、だけれどもね、爾いふ風に僻んで見られても仕方が無い事があるんですからね、其れはね、其れは、其れは浦島家の様なものがあるからです、ねえお八重さん、浦島家は華族の名を汚すのみか、人を生埋にする地獄の様なものですよ」

夫人はわつと泣き伏した。正彦は面白くないと見えて、妹と共に鞆に乗て居る。

「夫人もう其お話は御止し遊ばせ」とお八重は幾代の膝の塵を拂ひかける。

「いや〜〜」と夫人は拒んで「私に皆な言はして下さい、憐れいふ話をするのも邸中に貴方一人より外にありませんから、ねえお八重さん、どんな人の娘さんでも言はい皆な 天皇の赤子です、其れは金や力で什麼ともする事の出来ない

事です。其れを浦島家では勝手に貴方を生埋にしました、華族なんてものは此那人非人ばかりだと世間から呪はれる様にしたのは浦島の様なものがあるからです、申譯がありません、ねえお八重さん、憐れ言た處で最早取返しが付かない事です、死んで申譯をしたいと思つても萬龜子の事が氣になつて死されません、どうせ其中には屹度貴方にも申開きをしますからね、其れまでは何卒見逃して下さいね、貴方の様な優しい嫁を貰つた私は何といふ幸福だらう正彦は何といふ果報者だらうと思ふに付けて、是がね、是が……正彦が満足な身體であつてくれたら什麼に嬉しいだらうと思ひますとね、猶ほ更ら私は悲しくなります、私の辛いのは先祖からの劫で仕方がないとしても、何の罪もない貴方が……」

「夫人〜」とお八重は堪らなくなつて倒れた夫人を抱き起した。「私は屹度若様の御病氣を癒して御覽に入れます」

「癒りません」と夫人は漸く涙を収めて立上つた。

「いゝえ癒ります、確かに癒ります」

堅き自信に満ちたお八重の眼は美しく輝いた。

「其れは無駄です、先祖からの遺傳ですから」
「憚う言て夫人はまぢくとお八重を眺め「其れに就て貴方にお願があります」

「はい、什麼な御用でも」

「改まつては言ひ惜いがねえお八重さん」

「はい」

「何卒ね、嬰兒を生まない様にね……」

流石に言ひ惜かつたと見えて夫人は直ぐに顔を反向けた。お八重の顔は耳根まで赧くなつた。と夫人は殆んど聞えぬ様な小さな聲で「孫を生んでくれるなと頼む様な姑は此の世の中に又と一人あるでせうか」と言放つて両手を顔に當て、其處を去つた。正彦と萬龜子は何處へ行たか姿が見えない。お八重は黙つて柴垣を

左に曲つた、椎や檜が勢よく枝を擡げて中に銀杏の若葉が美しく日に輝いて居る。見覺のある樹だ」とお八重は思つた。此邸へ來てから此處へ出たのは今日初めてある。お八重は眼を擧げて向ふを見渡した、彼女は愕然と驚ろいた。

今彼女の眼に入つたものは一望の下に萃まる波濤の如き人家と眞直な道路、而して丁度鼻の先に聳え立てる例の物干臺！其れを載せた父の小家がある。

「あゝ此處だ」

彼女は恐ろしいものに會つた如く胸の動悸を漸と抑へ、木蔭に躲れて猶ほも見詰めた。家を出で、から漸やく三月か四月、十年の長い月日を暮らした様に思つて居たが、町の様子は何處も變つて居ない。彼女の頭は只だ湯氣に包まれた如く自分で自分が解らなくなると同時に理由の解らぬ涙が間斷なしに流れた。

と彼女は直ぐ自分の家の直ぐ隣に見慣れぬ建物が出来たのに氣が付いた。

「何だらう」

疑と瞳を定めると亞鉛張の家根と窓の間に墨黒々と書いた大文字！「無料宿泊所！」

はつと飛退つたお八重は兩手を舉げて天に感謝する如く其處に跪まづいた。

「出来た、あゝ私の義理が濟んだ」

五

牡丹の花の眞盛頃には油島子爵の誕生祝が開かれる、一年に一度と言ひ當日はほんの親戚や舊臣の重なるものだけで無禮講を許す事になつて居るので、思ひ／＼に當日を樂みに餘興を案出するものもある。

元より舊い華族ではあり、ほんの小宴と言つても來客は六七十名、其日になると自動車の音は引も絶らず音羽の町中を騒がした。

晝の中は本もの、藝人揃、種々なものがあつたが、來客は寧ろ其れよりも素人の餘興を待設けて居た。室毎の襖を開け放して殆んど百疊敷の廣間に、正面の鍛帳は鬼が潜んでるか蛇が潜んでるか、其れは後刻のお慰みである。永き初夏の日は築山泉水を照して、周圍にしつらへた花壇の牡丹はめら／＼と火炎を吐き出しさうに充滿に光を漲ぎらして居る。西の離室、東の亭、茶室や天幕の中にも一團づゝの客が笑聲湧くが如く語り合ふ。

中に婦人室は幕を張た亭で、黒紋付白襟、輝やく髪と帯、其れだけでも牡丹の花簇と對して美しさは名狀すべくもない。男の客と異つて高聲に話もせず、笑ひたくても顔を俯向けて唇を噛しめる位が關の山で、其れが日本の禮式になつて居る、恁ういふ場所に来る婦人は誰しも一番に苦しむのは衣服の問題で、白襟は

決まつても紋付を何れにしようか、帯を何れにしようか、帯留は？長襦袢は？櫛は？手巾の類まで決定するに一時間は懸る。而して漸と式場へ來てから先づ第一に氣を留めるのは他の人達の服装で、互に見交はしては安心したり耻かしい思をしたり殆んど心に暇がない。

丁度今ま入つて來たのは鷺山醫學博士の夫人で、酷く法華宗に凝つて居るのと男勝りといふので評判を取て居る。年はもう五十近い。一體多くの女の中には身装や姿に構はず、白粉氣もなく男の様にしているとといふのを自慢にする女もある、憊う言ふ女に限つて最早色氣も何も捨てたと告白したり、故意と女の身として口に出しにくい言を言つて人々を呆れさせては心中勝利者の様に喜こんだりするものだ。或る學者は憊う言つた。婦人にして白粉氣のないのは罪惡に近い、如何となれば其人は自己を美しくしようと女らしい心がないからだ。

鷺山夫人は罪惡者ではなからうが、兎も角随分素破抜家で亂暴である代りに多

數の席を賑はすには無くてならぬ人であつた。彼女は先づ第一にちろりと人々を見廻してにや／＼笑つた。

「まあ可かつた、私は什麼しやうかと思ひましたよ。少し暑いと思ひましたけれども紋付を着て参りましたね、實の處私には此春赤十字の總會で襟を掛替へたきりなんですよ」

夫人の自己告白に皆々くすくすと笑ひ出した。

「どうも何處へ出るにも一々衣服に氣を腐らしては仕様がありませんからね。お暑い、私は腰にふらんねるを巻き付けませんと冷えるもんですからハ、」
此の下卑た調子は却て人々の氣を浮立たせた、而して着物や頭の事に就て打明話が初まつた。老婦人達が好勝手な事を饒舌り續けてるのを若い女が欠伸を堪へて聞てる程詰らない事はない。又た老婦人の癖として若い女が側に居ると得て自分達の音語から今の女の惡口を言度がるもので、甚だしいのになると、公衆の

前で謙遜の積で我が娘の足らはぬ棚下しをする母親もある。

一人去り二人去り、若い令嬢達が悉く其處を出て花壇の茶席に集まつた時は婆さん連ばかりが盛に現代を罵倒してゐる時であつた。

六

久満子と明は昨夜からの喧嘩が未だ和解が出来ぬので二人共出席が遅かつた。

喧嘩の因はといふと大磯からの汽車の中で明が久満子に構はず同乗の客と談話ばかりして居たので其れを非常な侮蔑の様に久満子が怒つたのであつた。元とく此の二人はお八重と正彦が去てから何の刺戟もなければ波瀾もなく互に形式的の

甘い言葉ばかりを列べる許であつたので、久満子は何かしらん事件の出来を待設けて居たのであつた。

汽車の中で乗客と談話をした位では何でもないが、汽車の降り際に明が先に飛出した、其れが不親切であり失禮であり愛のない證據であり、早くお八重を見やうと思つてるから氣がそわ／＼してゐるのだといふ附會となつたのだ。元々其那に腹を立てる程の事でもないのに強て言葉を誇張して怒鳴つてる中に何時しか自分の感情までが誇張されて、果ては眞剣に怒つたり泣いたり喚いたりする。此の一嵐の吹いた後、明が謝罪つて来るか、でなければ久満子が泣き伏して明に狎へるか何れにしても亢奮した感情の後の甘い歡樂を久満子が豫期して居たのであつた。が、何を思つたか明は其儘ふいと立て出て行て了つた、歸るかと思つたら歸らず昨夜は終夜苛々した心持で寢覺勝であつた。

「今日は什麼事があつたつて明さんに言葉を掛けるもんか」と久満子は決心する。

「何とか少し氣を揉ましてやりたいものだ」と明は明で決心する。

牡丹園の前には若い淑女達が徐々打解け氣味に互に笑ひつ語りつ満庭の春色を此に萃めた。

「やあお揃ですわね、どうも實にお美しい事で流石に花の王たる牡丹も顔色なしですわね」

明は綺麗に渦巻いた髪を見せる爲に故意と帽子なしで燕尾服の白い胸を前に突出し、少し反身に片腕をくの字に横腹に當て片手の蕨の灰を一寸指先で振落し。

「いや何卒御許し下さい淑女方の前で蕨は失禮でした」

「何卒お構ひなく」鶴田といふ交際上手の令嬢が言ふ。

「ではお言葉に狎へまして……どうも今日は實にお天氣で結構でした、如何です大鹽さん此頃はピアノが大變に御上達だと承はつて居ますが、あゝ山北さんの御嬢様、過日のソローは全く結構でしたわね、すつかり魅されましたよ、おや朝

居さんのお嬢様是非ね、貴方に教へて戴きたいと思つたんですが佛蘭西語をすつかり忘れたものですから、詩をお讀みですか、イエツは何でですわ、女の方に新しいものを讀まれちや僕等は法螺の種ざれですな」

久満子の前で前後に氣を兼ねつゝ物を言ふと違つて、我れながら流暢で愛嬌ある辯舌に感服する、妙なもので女ばかりの集會は何となく陰氣なものだが中に男が交ると清水に沸騰散を一撮み入れた様に活氣が泡立つ。而して視線と話の中心點が必ず男の方に移る。明が右に左に若い淑女を相手に縦横天才を發揮して中に不圖氣が付くと久満子が將に露臺を降りて來る處であつた。

「しめた」と彼は思つた。「彼女は什麼な顔をするだらう」

氣付かぬ振して一層慥れくしげに淑女達に話し續ける、口を歪めて勿體らしく笑ふ、熱情的な眼をして首を傾げて相手の顔を緩りと眺める。而して相手から謎を解く様な流石が返されると、胸に波を打て嬉しくなる。丁度其の矢先に久満

子の姿が現はれた。

七

「あら久満子さん」

「まあ久満……」

聲々が一度に起ると久満子は故意と慇懃に兩手を膝に頭を深く低れた。が此の瞬間に彼女は早くも明の舉動を認めたのであつた。

「私が居ないと思つて得意になつて皆なに様子を賣つてるのだ」

人々の拶揆を軽く受け流して嫣然ともせず飽まで整肅に若い女達の間を通り抜

ける。衆々の濃厚した化粧や儀式張た服装、何れを見ても鶴や松竹梅菊桐の模様ばかりなのに反して久満子は山繭紋縮緬の茄子紺地の共裾に寫生趣味の淡泊した蘭科植物を刺繡と半々に染めた裾模様で、模様は更らに胸や袖の下背後まで飛々に玉虫の翼を三角や圓形に小さく飛ばして居る。其上に帯は白茶地に金糸を刷毛書風の横段とし濃緑で幹の太い竹を思ひ切り雄大にしたのを締め、頭は一切金銀や青貝の氣を抜きにして、首筋だけを少し濃目に顔は天來の色白にほんのりと薄紅を刷いた許りなので、數ある令嬢貴婦人の中に此人ばかりが際立て心憎く見えた。

其れに明が居るので久満子は益々澄まし切て口敷を言はなかつた。恚ういふ姿を見たら誰しも彼女が舌端火を吐いて明と口説を圖はす剛の者だとは思ふまい、美しく縮れた前髪が婆娑と額に掛ると眉と額の距離は極めて短く見ゆる、其處に抛棄つた様な豊かな眉毛が奇妙に人の心を動かす様な趣を帯びてぼちやくくと

小肥り。肩の滑らかな工合は既に處女の境域を脱した女とは見えるが、併し深く合はした襟が帯に締め付けられて小高くなつた乳の邊は男に與へまじき胸の秘密を抱ける幼々しい處女の羞耻さも籠つた。

彼女は到頭明には一瞥をも加へず其處を通り抜けた。

「まあ什麼なすつたんでせう」と山北令嬢が言ふ。

「何か怒つて被居やるの？ 遠山さん？」と朝居令嬢が言ふ。

「何ですか、あの女は傲慢が過る様ですね」と明は妙に改たまつて、急に「ハッ

くく」と大聲に笑ふ。實は笑ふべき場合ではなかつたのだが、自分と令嬢達

と如何に親しく笑話をしてるかを久満子に聞かしたかつたので。

明の胸算は圖に當つた。久満子は向ふの明放した温室の入口でちらと此方を見た、途端に明は横を向いてもう一度笑つた。驚いたのは令嬢達である。突然に耳の傍で大聲に笑はれたので一同眼を欬だてた。

「什麼なすつたの？」

「いや實は其の昨夜讀んだ笑歌の一節を思ひ出しましたので」

慙う言ひながら明の眼は何處までも久満子の後を逐ふた。久満子は温室の窓に半分横顔を出して多數の若い紳士共を相手に語つて居る。女の群に入て管らない平凡な話をしてるとは異つて男を相手にしてると段々氣が逸んで来る。第一に白粉や紅生温い御世辭などよりも、活々した男の眼、節太な男の筋肉、強い、力ある、而して何處までも自分を中心として誘惑的に言葉を向けて來る圖々しい中の屈從！ 爾いふ周圍に身體を置くと自分が絶えず他から或る血の活動を要求される様な氣がして胸には張詰めた心の底に何とも言へぬ快味のある波動を感ずる。

彼女は故意と半身を窓から見える様にして隣席の増永といふ洋行歸の法學士と肩を並べ其の人の卷裏に火を付けてやつたり、又自分も吸つたり、時としては其の灰を落す振して窓から顔を出したりした、此人達は日本の外交問題に就て議論

を闘はして居た、丁度其日の新聞にカリフォルニアの議會で日本人排斥案が通過したといふ電報が出た。

「日本人の品性が悪いからだ」と甲が言ふ。

「いや人種の戦が遠からず来るよ」と乙が言ふ。

「要するにだ」と色の黒い髯の政治家が叫ぶ。

「我輩は醜業婦保護法案を議會に提出したい、世界を開拓するには先づ婦人を移住させんと男が出て行かんよ」

此の議論に一同あつと感嘆して笑つた。而して久満子の方を見た。久満子も聲を擧げて笑ひながら窓から明を見た、と明も此方を見て居たのでふいと背後を向けて増永の肩にすれ／＼に寄た。

「彼女は何を思つた」此人達の議論は何といふ粗雑で概念的なんだらう、明さんが居たら屹度此人達を感服させる名論が出るんだわ」

擦り寄られた増永は此時久満子の足と自分の足と觸れたので少し胸騒ぎをしなから其儘動かずに居た。

八

「大分話が面白さうだね」と浦島子爵は向ふの卓子で老人連と語りながら、此方聲を掛け「久満子お前は少し老人連の方へ来て賑はしてくれんか」

「私？」と久満子は笑つて「私厭でございますわ」

「どうして？」

「お話が澤山ありませんもの」

「話は澤山にあるぢや」

「貴方のお話はねえ伯父様、大抵お酒のお話でせう、私は一升飲む、いや一升五合飲む、昔は二升は飲めたものだ、正宗も可いが銀釜の方が可い、まあ其那お話を、でなければ基のお話、其外には骨董を賣て家作を建てる様なお話でせう」

「ハ、ハ、ハ、」と老人連は悉く天井を向いて笑つた。實は丁度其時謠曲俱樂部を設置するに就て其費用として銘々の所有して居る地所の地代を値上げしやうかと相談して居る最中だつたのだが、此計畫は久満子の一言に擧げられて其儘沙汰止となつた。讀者諸君、諸君の中に本郷の片田子、牛込の枝本氏、小石川の並木氏の地所に住居して居る人があるならば、主人のお道樂の爲に地代を値上げされる災難を救うてくれた久満子に感謝すべきである。

明は淑女達と戯れながらも心は段々不安になつて來た。

彼女は増永に氣があるのか知らん、増永といふ奴は恩人を賣たり友達を中傷し

たりする奴だから什麼かすると彼女を誘惑するかも知らん……併し豈夫彼女が……いや僕が餘りに焦らし過ると自暴になつて……行て見やうか知ら……いや併し今更ら」

憊ういふ事を考へてる中に彼女の胸の波が次第に高まつて來る。

「忌々しいな」と彼は悶えた。いや此處が自己の忍耐力を試して見る好機會だ、此處で屈從すればもう頭が上がらない」

憊う思つてる中に彼は今ま最も好き相手を見つけた。今しも亭の段を降りて來るのは正彦である。次で桃色の女唐服を着た婦人が一人、其れはお八重であつた。此二人が芝生に現はれた時一同はわつと許に喝采した。正彦は天鵝絨の短い上着、半洋袴、帯革を上に着て靴だけは普通であるが、宛然丁抹の公子ハムレットの服装である。頭には極めて珍奇な毛糸の頭巾を被つて居る。人々は正彦の服装に驚くよりも更にお八重の服装に驚いた。飾氣のない桃色の女唐服で、其れに

裾はだぶぶくに膨んでベチコートが一尺も下に露はれて曳すつて居る。夜會服や儀式服なら長く裾を曳くべきだが、手品師や廣目屋の着る様な女唐服が身丈に合はぬので地に付くのをさへ見窄らしきに、彼女の被つた帽子は麥莖で其れに澤山の花——薔薇や牡丹、百合が葬具屋の花環の様に粘着してある。宛然これ大道をハーモニカで練り歩く樂隊の女である。

「まあ」

「何でせう」

「あら此郎の若様よ」

「あれがお妾なんですつて」

「まあ什麼したんでせう」

「餘興をやるのかしら」

嘲笑の聲がどよめき渡る中を正彦は人々に紹介し廻つた。

「これが僕の夫人です、美しいでせう、どうです、僕は真に——愛して居ます」

一同くすくす笑ひ出した。

九

正彦とお八重は何もして此處へ来たのであらうか。

狂氣の身體で來賓の中へ飛出して若し過失があつては困ると、誰よりも氣を揉み出したのは幾代夫人であつた。

「什麼にかして彼方の方へ行かない様に氣を付けてやつて下さい」とお八重に頼

んだ。さなきだに浦島家は發狂の遺傳であると言はれてる矢先正彦を見たら來客は什麼に侮蔑するだらう、侮蔑は覺悟の上だが、侮蔑を侮蔑と知らぬ正彦が可哀さうだ。

夫人の言ふまでもなくお八重は今朝から心配をした。彼女は一生懸命に正彦を賺して晝を描いたり晝齋の整理をしたり、面白くもない英語を教へて貰つたり。繩飛や、キヤツチボール庭球、あらゆる遊戯の相手をして只管に氣を紛らさうと努めたけれども、母屋の方の賑かな囃子鳴物が手に取る如く聞ゆる、あれを聞いては若様が飛び出すかも知れぬと思へば氣が氣でない。

「さあ若様、唱歌を唄ひませう」

お八重は我が耻かしさを忘れて、小學校で覺えたばかりの唱歌を唄ふ、萬龜子に加勢を頼んでハーモニカを弾く笛を吹く。けれども奥の物音は是等に打消されべくもない。聽て正彦は耳を欬つてた。

「あゝ今日はお父様の御誕生日なんだね」

お八重ははつと思つて冷汗を催した。

「いゝえ、今日ではございませんよ」

「いや今日だ、お八重行かう」

「でもねえ若様、お八重は參られませんか若様も御止し遊ばせ」

「お前が行かない、什麼して？着物が無いからだらう」

「はい爾です」

「其れちや止さう、お前が行かないなら僕も行かないよ」

「爾遊ばせね」とお八重はほろりとした。散々遊んでころりと横になつたので、お八重は搔卷を取りに其處を立去つたが、再び戻つて見ると正彦が見えぬ。おやと思つてる中に纏て土藏の方から喜び勇んで走り來る。手に提げたのは一着の女唐服、是は元と二十年も前に何かの餘興の時に、活人畫の西洋鶏卵買になつた人

の着たものであつた。

「好いものがあつた、これを着てくれ、オフィリヤになつてくれ」と正彦は早速天鷲絨服に着換へる。

「はい、オフィリヤになりませう」

如何なる馬鹿氣た事でも厭うては居られぬ、來客が散するまでは緊ぎ留めねばならぬ。お八重は笑ひながら着替た。生れて初めて洋服といふものを着た彼女は我れながら可笑しくもあり耻かしくもあつた。

「よし／＼お前は美しい、身も其頃は脚に戀をしたものぢや、ハ、ハ、ハムレットの臺詞は巧いな」

「お上手で被居やいます」

「さあお前は臺詞を知らんな」

「始終お相手を申上げて居ますから存じて居ます」

「爾々爾だ、さあやるぞ、是は／＼オフィリア殿」

「これは殿下、貴方には此日來如何遊ばされました」

「巧い／＼、お八重巧いぞ、誰か見物人が無ければ詰らないね」

「いゝえ見物人のない方が宜しうございます」

「でも張合がない、お前の巧いのを誰かに見せたいな、可しく／＼彼方へ行かう、皆なに見て貰はう」

「若様」といふ間もなく正彦はすた／＼と走り出した、驚破一大事とお八重は後を追掛けた。

「若様ー 若様ー」

正彦は振向もしない、追付いた時は既に綺羅星の如き來賓の眼が齊しく此方を見向いた時であつた。

「逆らへば却て如何様の事をなさるか知れない」

お八重は度胸を据ゑた、彼は我身に桃色の古びた女唐服を着て麥藁帽の上に花を括り着けた耻かしき姿も忘れた。而して一心に無事に済む様にと心に祈つた。

十

けれどもお八重の苦心も段々無駄になりかけて来た。人々が正彦の周圍を取巻いた。初めは病者に對する同情から可成く氣を引立てやうと懇篤に劬つた、次は正彦の舉動に興味を感じて来た。稀には餘りに氣の毒に思つて、「若様彼方へ參りませう」と執成した者もあつた。併し人々に賞められる嬉しさと久振で多勢の人に接した神經の興奮とに正彦益々面白くなつて来た。

「什麼です、僕の奥様は美人でせう」

言ふ度毎に人々は喝采した。正彦はほい／＼悦に入つて自分も一緒に笑ふ。笑つたのが可笑しいと言つて人々が又た笑ふ。お八重はもう羞かしさが昂み上げて満面朱を注ぐが如く人々の方へ眼を向ける事すら出来ない。若様はと見ると荐りに燥やぎさつて若い令嬢達や貴公子の群に入りながら大聲に笑つて居る。其中に彼女の帯が緩みかける、下着が滑り出す、腰に巻いたものや釦で留めたものが凡て脱け出さうになつて来た。彼女は立往生の姿で思案に暮れた。と其處へ来たのは例の明である。

「おうお八重さん、お困りの様ですね、此方へ被來やい」

慙かる時には誰彼の差別はない、知合として一人もないお八重は直ぐに明の手に惹かれて幕の隙間から木蔭に身を潜めた。

「什麼して此那頓狂な事をしたんです、此の服なんかはもう古くて離々になつて

るぢやありませんか、其れに此の釘は此の穴に合ふのぢやありませんまい」

「どうも着やうを存じませんですから」

「さあ此方をお向きなさい」

お八重の前に立ち横に廻り腕に凭らせ胸に顔を付けなどしながら釘や帯を直してやつてる中に、不圖彼は今ま此女を自由にしているのは自分であるといふ様な気がした。で急に誇りがましい心になつて急に窓の方を見ると窓には久満子が殆んだ伸上る様に半身を出して此方の木間を透し睨めて居た。

「巧い〜此奴は大成功だ」と明は微笑して猶ほもお八重の身體に觸つた。

「まあ呆れた」と此時久満子は頗る不安になつて來た。「彼處にお八重が居る、あの態は何だらう、明さんも明さんだ、此那場所で……」

初めは可い加減に焦らしてやらうと言葉も掛す眼も呉れなかつたが、他の令嬢達とは異ひ相手はお八重である、恚う思ふと久満子は急に赫と逆上せあがつた。

「可いわ〜、どうなつたつて構ふもんか」

性來の瘠我慢が起つた、彼女は側近く誰か相手を探して眞剣に男を魅して見せてやらうかと思つた、で四邊を見ると人は一人も見えない「あら私一人を残して行て了つて酷いわ」

彼女の心は燃ゆる様に熱くなつた。彼女は唇を噛むだまゝ其處を出た。

一方明は散々お八重を庇ひながら久満子の悶ゆる様をちらり〜と見やつて獨り喜んだ。

「今に泣いて來るぞ、其時に〜」

「もう宜しいでせう」とお八重は迷惑さうに言ふ。

「もう可いですが、未だ少し……」

「これで結構でございます」

「お待ちなさい」と明は前に立塞がりながら、

「外國の禮式を教へてあげませう」
首に手を掛けやうとする一刹那、明は突然首を縮めて棒を呑んだ人の如く立竦んだ。

久満子が横合の木の下に立て居たのである。

十一

「何をして被居やるの？」と久満子は我れと我が慄へ聲を抑へて言ふ。

「いや何も、一寸……」

「知て居ますよ、お八重、お前は好い度胸だね」

「其那大きな聲を出さんでも」と明は冷やかに言ふ。

「大きな聲を出して不可ないんですか、えい私は嫉妬よ、嫉妬だから言ふのよ、其れが何ですか」

「貴方だつて什麼ですか、先刻増永に……」

「其れが什麼したといふの？」と久満子は唇を歪めて、

「貴方も餘程嫉妬ね」

「元より僕も嫉妬家です」

冗談から駒が出て、双方の牽制運動が遂に白兵戦になりかけた時、幕の内部で喝采の聲が起つた。

「巧い〜」

「いよう千兩〜」

「成田屋あ」

種々な聲が簇出すと、よみの中に正彦の聲が聞える。

「慈悲の神々も護らせ給へ。抑、汝は在天の靈か閻府の鬼か、汝が齋らしは皇天の息吹か地獄の毒氣か、汝が心は善か悪か……血の氣も通はぬ屍骸の汝が、再び鏡を引纏ひ、月明滅たる夜を寒み、物凄き御出現……」

「日本一！」

「世界一！」

喝采の聲、拍手の音、群衆の眼は均しく其方に向く。彼等は狂者に對する氣の毒といふ念よりも寧ろ半ば好奇心に惹き付けられた。丁度低級の婦人小兒が一寸法師の踊を見る様な心持で、狂者の割合に比較的整うた臺詞廻しに感心した。人間といふものは自分より弱いもの愚なるものに對しては侮蔑の念を起しながらも多少其の者から興味を得やうとするものである。群衆の感興は更らに正彦の感興を助けた、喝采と拍手に煽て上げられた彼は昂ぶる神經に少し戰慄を帯びた。彼

は名優が舞臺の上から見物人を見下すが如き鷹揚な態度で霎時築山の上から群衆を見下してゐる中に突然幕の隙間にお八重の姿を見付けた。彼は疾風の如く走り寄

た。
「おうオフイリヤ此處に居たか、結婚などは致すでないぞ、若し何處ぞへ嫁がむとならば身は祝儀として此の呪詞を贈らうす「たとへ氷の如く操正しく雪の如く清かりとも、そもじは世の誹謗を免れ得さらむ」。ハテ尼寺へ行かれい、さらばぞ、若し又強ひてとならば痴漢の許へ嫁ぐがよい……」

「痴漢の許へ嫁ぐがよい」と明は大聲に囁した。一同笑ひたきを泳へては又た笑ひ出した。

「痴漢の許へ〜」と久満子も腹を抱へて笑つた。「お八重能く聞て置くんだよ、痴漢の許へ嫁ぐんだとさ、えつ？ オフイリヤ」
「其次〜」と明が言ふ。正彦は向直つた。

「止めよ！ 身はもう我慢がならぬ、それ故にこそ此の發狂此後とも結婚といふは誰にもさせぬ……」

「若様！」とお八重は我を忘れて正彦に縋り付いた。「お止し遊ばせ〜皆さんが貴方を笑つて被居やるんです」

「いや褒めてるんだよ」
「やり給へ〜」と明が言ふ。

「何ですつて？」

正彦の踰越く身體を右腕に支へ半ば肩を開いて斜めに群集の方に向きながら、

恰かも乳虎が敵に對する様に引締つた口元を更らに深く引締めた。

「貴方は若様を玩具になさるんですか、若様は御當家の御主人ですよ」

「お前は何だい」と久満子は軽く突込だ。

「私は若様の妻です」

十二

群集は鳴を静めて事の成行を見た。今までの感興が悉く去つて、苦々しさうに此の場を去る人もあつた。正彦は只だ呆氣に取られてお八重の腕に抱かれたまゝに立て居る。

「退れ〜場所柄を辨まへんか」と明は躍起になつて怒鳴た。

「場所柄は知て居ますわ」といふお八重の顔は蠟石の如く蒼白めて居た。

「まあ可い〜、彼方へ〜」と久保田家令は慌たしく仲を隔てる。

「いゝえ〜私は此處を退きません、私の言ふ事が間違つてるか什麼か皆様に聞

て貰ひませう、若様が何をされたといふんでせう、若様に何の恨があつて恚う苛めるんでせう、私は其れから聞きませう、えい聞きませうとも遠山さん御返事がな
いの？ 耳がないの？ 久満子さん貴方は御逃げなさるの？」

「逃げやしないわ」と久満子は人々の中に隠れ顔に言た。

「黙れッ」と遠山。

「黙らつしやい」と久保田家令。

「黙りません」とお八重は怒鳴り返した。

「禮儀を知らんか」

「豆屋の娘ですもの」とお八重は前に進み出した。彼女の眼は憤怒の涙に濡れて
少し汗ばむだ額に後れ毛が絡んで、引釣た眉、細い口元の痙攣、下唇は歪んだ
まゝ顫へて居る。彼女の後頭部は火の様に熱した、彼女は最早自分は何者である
かといふ事が解らなくなつた、而して彼女の胸は只若様が可愛さうだといふ念で

満たされた。

「禮儀を知て居なさる方達なら、病人を捕まへて玩具同様にするのが禮法にある
か其れを伺ひませう、なかに私が此邸を出て了へば其れで可いんでせう、其那に
苛める位なら私が若様と一緒に出て行きますせう」

「うむお前と一緒に行くよ」と正彦が言ふ。久満子は聞える様に笑つた。お八重
は見向きもせず又た續ける。

「其れや若様は普通の人とは異つて居ます、異つて居けれども何も貴方達に迷惑
を掛けやしないぢやありませんか、貴方方はね、御自分より弱い者だと見ると踏
んだり蹴たりして喜んで被居やる、其れぢや餘まり解らなさ過る、若様はね貴方方
の様に道樂もなく物見遊山もなさらず、お太陽様の色さへ薄暗く見えて何を見て
も何をなすつても心底から面白い楽しいと思ふ事が出来ない身體ぢやありません
か、爾思つたら少しは氣の毒だ可愛さうだ位に思つてくれたつて華族様方の御

識に係はるつて法はありますまい、餘まりです〜猫が鼠を黐る様に若様を玩具
になさるのは餘まりです」

「爾だ〜餘まりだ」しほ彦は拍子の抜けた合槌を打つ。其の顔を凝と見詰めて
お八重は初めて歎歎あげた。事此に至れば何人も傍觀する事を憚る様に一人去り
二人去り、散々になつて餘興場へと引込む。

久満子と明は顔を見合はした、彼等は此の不意の出来事の争ひに痴話的の小さ
な争ひが何處へか飛んで了つた。

「正彦の白痴なる事を自ら公衆に披露した様なものだ、あれでは逆も相續が出来
まい」と明は思ふ。

「黙つてれば好い氣になつて明さんに手を出すもんだから恥を搔くんだ」と久満
子はお八重を尻眼にかける。而して二人はけろりとして肩を並べながら笑ひ興じ
つつ其處を去た。

日は段々に暮れかけて座敷の方は萬點の電燈に晝の如き廊下を人影入亂れて往
きつ戻りつ、宴會が初まつたらしいが、庭は靜かに幔幕を吹く風そよりに寒く、
牡丹の花がほたり〜と音なく地上に落る。

十三

お八重は正彦を連れて室へ歸つた病氣の故として何か亢奮する様な事があると
後で非常な疲勞を感じる。正彦は只だ呆然り坐つたまゝお八重が衣服を着替へる
のを眺めて居た。と母屋の方から笛太鼓大小の鼓の音や足拍子が手に取る如く聞
える。

「行つて見たいな」と正彦が言ふ。「能が始まつた様だね」

「でもねえ若様」とお八重は傍近く坐つて。

「彼方へ被行つても面白い事ありませんから此方で私と闘球盤をなさいますね」

「お前は厭か」

「はい」

「爾か、お前が厭なら僕は行かないけれども……どうしてお前は厭なんだい」

「でもねえ」

「あゝ爾々皆が僕を苛めるんだね」

「えい」

「僕を馬鹿にしないのはお前だけだね」

「……」

「お前は僕と二人で居る方が好きなんだね」

「……」

「はゝゝゝ」と正彦はさも楽しさうに笑つた。「二人限で居やう、其れが好い、僕はお前の好きな事なら何でも好だよ」

慙う言てる間に正彦は疲労から眠氣を覺えて眼をとろりとさせた。

夜具を敷いて正彦を寝させ、お八重は犖然と其の寝顔を眺めてる中に涙がほろ／＼と零れた。慙ういふ事は今までに珍らしくない。けれども今日の涙は毎もの涙と異つて居た。

「僕を馬鹿にしないのはお前だけだね」と言つた正彦の言葉が何故か深く／＼耳底に残つて居る。其中に彼女は先刻の光景を回想した。明と久満子、家令の久保田數十人環視の中で正彦を玩具の如くに取扱つて打興じた、其の人達の侮蔑に満ちた眼の色が今ま眼前に現はれて居る。其れと同時に嘲笑の的になりながら得意に

なつて正産の姿、自分が吾を忘れて日頃の不平を吐き立てた心持！ 其の時の心持が今また新に彼女の情熱を暖めかけた。

「あんまり人を馬鹿にしてるわ」

彼女は唇を噛みしめた。此時の彼女は只だ一人の弱者を背後に庇ひながら百萬の敵に對する様な俠勇の氣を以て満たされた。其れは父の宅平から承けた尊き彼女の血であつた。と彼女は急に四邊を見廻した。

「あれだけの多勢の前で、女として言ふまじき亂暴な言葉を並べ立てたのは私も悪い、いくら何でも餘り行儀を知らなさ過ぎた」

恚う思ふと羞耻しさが充滿になつて身體の置所が無くなる。

いつその事何處かへ逃げて了ひたい」

彼女は立上がつて吻とした様に髪を撫で上げる。

「私が居るばかりに此那ごたくが始まるんだ、久満子さんも遠山さんも煙つ

たいのは私ばかりだから……私が居なければ此郎が波風が立たないのだ、第一に夫人と殿様とのお仲が悪くなつたのも私が此郎へ來てからの事だから……」
彼女は一條の活路を得たる如く勇み立た、早く早く出て行けと心の奥から促がすものがある。而して彼女は此郎を出ると自分の幸福が何處かで自分を待てる様な氣がした。彼女は疑と電燈を見詰めた眼を段々下の方に移した。彼女は愕然として身を慄はした。

「あゝ若様！」

ハムレットの服を着たまゝ、すやくと眠つて正産の寝顔！ 極めて安らかな静かな呼吸！ 眉の間に如何にも満足らしい色が漾うて見える。

「あゝ若様！」

彼女はびたりと枕元に坐つた、而してしみくと寝顔を睨めた、臆て突如正産の額に接吻した。

「若様く〜 貴方は私の良人ですわね」

十四

これが彼女に於て曾て経験のない感情であつた。什麼いふ譯で眠れる良人の額に接吻をしたか、彼女には勿論其れを考へる暇もなかつた。彼女は一種不可思議な自分の心持に胸を轟かした、何だか大變恐ろしい事でもしたかの様、而して其癖其那に悪い事でもない様にも思はれる。足を忍ばして縁に出て、逆上せた顔を初夏の風に吹かせると冷々として氣持が好い、彼女は下りるともなしに庭へ下りた。木立の背後は離室の屋根を越して夜

宴の灯の息が月夜の空をぼんやりと見せる。彼女は足に任せて只ふら〜と歩き出した。と見ると彼女は何時しか椎の木の下に來て居た。向ふ側の高臺の人家は疎らに灯影を漏らして親しげな窓明がぼちり〜彼方此方に相照り交はして居る。一脈の丘の腹から下は月の蔭げに暗くなつて居るが、足下の音羽の町は横に細長く走り行く提灯まで晝の様に覗かれる。「私の家は〜」と彼女は木立を透して見下した。亞鉛張の家根が硝子の如く月光に輝いてる寄泊所の下に小さき一握の家、物干臺に取忘れた襦袢の様なものはお父さんのであらうか、但しは徳ちやんの襦袢であらうか。「お父さんは何をなすつて居るだらう、私が今ま此に憊うして立て居るとも知らずに、私の事を案じて居るだらう、病氣は什麼だらうか、お寢みの時に御自分で夜具を敷き伸べるだらうか、御父さん〜」と彼女は口の中で言た、と「おうお八重か」と言ふ父の聲が耳に聞える。

「おや」と彼女は耳を敏だてた。植込を吹く風がざわ／＼と下藪に音たて、行く。「お父さん／＼」彼女は又もや小聲に言て見た、而して自分の聲が急に悲しくなつた。此時裏の戸がぎいと開いて灯影がちらと走り出ると其處に父らしい人の姿の輪廓だけが見えた。

「あらッ」とお八重は慌て、椎の蔭に身を寄せたが、首筋を長く前へのめる様にして見詰めた。

「たつた一目で可いからお顔を見たい」

彼女は伸び上り／＼した、けれども月は崖の木に遮られて其處から眞暗である。ざあ／＼水を捨てる音がしたが直ぐ再びぎいと音がして戸の外は元の間に復つた。

「あ／＼／＼」とお八重は身を悶えて椎の木に撞まつた。

「お顔を見たい／＼」

憊うなつて來ると殆んど氣狂はしきまで父を見たくなる。「家の中は嘔汚なくなつてるだらう、寝巻や蒲團は洗濯したか知らん、いくらお秀さんが親切にしてくれるとしても赤兒もある事だから爾は手が届くまい、どんな顔をしてどんな着物を着て被居やるだらう」

彼女の情が止め度なく募り出した。彼女は夢中に四邊を見廻した。と松並木の間に窪地がある、窪地は片低がりになつて土は松の重みに石垣ごと崩れて居る處がある。彼女は前後の考もなくす／＼と降りた、其處は宿泊所と我が家の間の垣根で、垣根と言ても一二本の竹が残つてただけである。

「まあ變つた事」

彼女は材木と石を積んだ草の上に立て吻と息を吐いたが、急に身を翻して柳の下に隠れた。丁度二間ばかり先に極めて靜に動いて來る人影が見えたので。

其れは恰も四邊を憚かる様に忍び足である、柳の下は崖を背にしてるから鼻を

摘まれても解らぬ程暗いが、今来る人は向ふの屋根や窓に照る月明を背後にしてるので次第に姿が解つて来た。

「お秀さんだ」とお八重は吃驚して息を凝らした。

十五

「まあお秀さんは何をしてるんだらう」

お八重はお秀の懐かしさよりも、其の舉動の餘りに不思議なのに何を考へる暇もなかつた。不思議さは更らに別方面より起つた。丸太を立てかけた物置小舎の背後から此方を指して来る草履の音が聞える、白い鼻緒だけがちらり／＼と動く

のが見えて次第に近付くと其れは男である。

「済まなかつたね、待たして置いて」と男はお秀に寄添た。

「あら虎さんちやなかつた」とお八重は吻と胸を静めた。

「えいおい、話は什麼してくれるんだよ」

お秀は黙つて居る。

「何とか早くしてくんな、俺だつて好んで足を運んでるんぢやねえからな、えいおい、話が付かなけりや付かねえ様に何とか方法もあらあね、元／＼他人の仲ちやなしさね」と言つて男はお秀の肩に手を掛ける、お秀は振拂はうともせず黙つて首を低れた。

「お秀さんが情夫を持つてるのかしら」とお八重は仰天した。「餘まりだ／＼其那女とは知らなかつた、虎さんとは切ても切れない戀仲だと思つたから自分が身を退いて此那辛い思をして暮らしてるのに、あらう事か情夫を持つなんて、餘

まり人を馬鹿にしてる」

お八重の顔は憤怒に熱した。「よし／＼すつかりと見届て耻を搔かしてやらう」
彼女は柳の枝を顔で分けて二人の容子を覗がった。

「だつてね、私には什麼する事も出来ないんですもの」

「出来ない？ たつた二十兩や三十兩の金だぜ」

「でも一文でも残があれば宿泊所の方へ廻したり御醫者さんの方へ持て行きますから」

「金がなくても品物があるだらう」

「品物だつてもう何にもありませんわ、皆な貴方に與つて了つたぢやないの？」

「子供の着物があるだらう」

「貴方は子供の着物まで剥ぎ取らうといふの？」

「當り前よ、俺の子ぢやあるめえし」

「無論貴下の子ではないわ」

「虎的の子だといふのかい」

「えい爾ですとも」

「ぢや俺の婢の時から虎的と私通いて居るんだね」

「どうでも可いちやないの？」

「可くはないよ、俺に斷らねえで勝手に虎的を亭主にしてさ、黙つて居られるかよ」

お八重は再び呆れて開いた口が塞がらなかつた。「あの男は長次とかいふ男に異
ない、死んだと思つて居たのが生きて來たんだ、まあ其れで何をしやうといふん
だらう」

「長次さん！」とお秀は泣聲になつた。貴方は先日私に何と言つて？もう二度と
は來ないから旅費を出してくれつてさ、私は什麼なに苦しい思をして旅費を作つ

てあげたと思つて？ 塵一本だつて私の所有ではありません、皆な虎さんが汗みづくになつて稼ぎ溜めたものぢやありませんか、其れでも足りないくで宿泊所やら病人やらお徳の事やらで食するものも食ずに居るのを貴方は何とも思はないんですか、貴方だつて元々宿泊所で生命を助けられたぢやないの？」

「なに？ 生命を助けた？ 殺されたり助けられたり、俺は玩具ぢや無えよ」

「其れぢや什麼すれば可いの？」

「やつぱり金だ、金だね」

お秀は蒼白になつて身を顫はした。一度ならず二度ならず是で三度目である。

虎吉に打明けさへすれば事の始末が付く、第一に殺人罪を犯したと思つて居る虎吉の煩悶も迹なく消して了ふ事が出来る。虎さんは什麼に安心するだらうと思ふに付けて扱て其の結果として自分は什麼なるだらうか、長次が生きてると知たら屹度離縁される。虎さんと別れたら自分はもう生きてる甲斐がない。

十六

此の虚偽、空恐ろしく思ひつゝも、戀はお秀の決心を鈍らせる。虎吉の眼に入らぬ様に、自分の着物夏冬ともに持ち出して、空な簞笥の抽出の鍵を失くしたと言つて巧く糊塗して置いたものゝ、此の罪何時露現はれる事だらうと思へば日毎に針の蕊に坐つてる様！ 其れに拘はらず飽くまで付齎ふ長次の脅迫！ お秀は絶體絶命である。

「俺はお前を苛めるのは好き」と長次は軽く言ふ。「虎的は男だから若え女にや手も出すだらうさ、だがお前は女だぜ、えいおい、姦通つて奴は女が悪いに決まつ

てるんだよ、法律は男の方が重いさうだが、其りや情事の味の解らねえ人達が作
えた法律だ、何と言たつて女の方が悪いや、だから俺はお前を憎むんだ、お前ば
かりを責めるんだ」

「たんとお責めなさい」とお秀は腹立たしく言放つた。

「たんと責めるよ」と垣根の棒杭に尻を載せ足を組み合はせて。「うむ責めるとも」

「いつまで責めるの？」

「死ぬまでだ」

「長次さん！」とお秀は長次の手を握んだ。「私を殺して下さい〜」

「冗談ぢやねえ、お前を殺したら俺も死な〜さやならねえ」

お秀は聲を偷んで泣いた。

「ぢや歸るよ、まあ一晩考えて見ねえ、どうせおいそれと出してくれた例は無え
んだからな、明日又た來るよ、あばよ」

長次は絆纏の裾を肩から斜に引張上げ、古びた中折帽を前のめりに被り直しな
がら足元軽く丸太小屋の背後から笹藪を抜けて銀杏屋敷に差懸つた。其處は棕の
並木を境界にした寺の背後で、銀杏ばかりを植ゑた空地である。

「は〜、〜」と彼は笑つた。「明日の晩には又た幾許かになるんだ」
と突然彼の前に立塞がつた女がある。

「一寸待て頂戴」

「私ですか」と長次はびくりとして振向いた。

「貴方は長次さんといふのね」

「はあ」と曖昧な返辭。「して貴方は？」

「誰だつて可いちやないの？」

「其りや誰だつて可いさ、夜中に此那淋しい處で若え女と懸意になるなんて全く
悪くはねえ話だ」

「側へ寄りや不可せん」と女が言ふ。「貴方は今ま何をして居たんです」

「何もして居やしねえ」と長次は吼える様に言ふ。

「嘘をお吐きなさい、貴方は弱い女を窘めてたんでせう」

「貴方の知た事ぢやありません」

「爾です」と女は力なく言た。「私の知た事ではありません、けれども私は少し事情があつて此處へ來たんです」

「何か御用ですか」

女は黙つて手を差し出した。「さあ此の指環を御持ちなさい、明日の今頃、現金と引替にませう、其代りにね、其代りに……今の女を窘めるのは止して下さい」

「貴方は一體誰ですか」と長次は呆氣に取られて指環を受取りながら女の顔を透して見た。

「黙つて御歸りなさい、誰にも言ちや不可せんよ」と女は顔を反方向けたが、直ぐ

脱兎の如く走り去た。
女はお八重である。

因果

一

夏も過ぎて庭の葉鶏頭が色づく頃になれば泉水の水も澄色に金魚の鱗も鮮やかに見える。落葉には早いが薄紅の楓が唯一の庭の眺となれば青桐の實のからりと風にも鳴るのも秋の景色である。

浦島家では此頃親戚の出入が激しくなつた、當主の實兄秋園子爵を初めとして栗林子爵、其他の人々は毎日の様に來る。今日も其の會議が初まつた。晴れ渡つた空に鶉や鶺鴒の聲も聞える亭の上に席を設けて、集まつた人はほんの重なる親戚の二三人、其れに今日は珍らしくも幾代夫人の蒼白めた顔に並んで久満子の艶や

かな姿も見えた。

「處で其の……」と栗林子爵は髻を撫で、

「幾度同じ事を繰返しても同じ事ぢやからのう」

「全く爾です、詰り幾代さん貴方の意向で決まる事だから」

「私の？」と幾代は良人の子爵の眼を避ける様にして「私の考は幾度申しまして

も同じ事でございます」

「血統斷絶か」と良人子爵は苦々しく言ふ。

「はい、其れより他に致し方がございません」

「其れや餘りに頑固ぢや、いくら私は養子ぢやからと言って其れだけは承知が出來ん」

「まあ可い、静にしてな」と栗林子爵は二人を和める様に故意と笑顔を見せ、「奥様、何とかもう少し穏和な御考がなからうか、貴方達が言争ひをした處で話

は一向纏まらんで」

「私の考へは其れより他にございません、憊ういふ因果な血統に生れましたのは私の悪縁と諦めるだけでございます、私に致しました處が何で自分の血統を絶したい事がございませう、けれども今此で悪い血統を絶しませんと何時までも世の中に害をなす許でございませう」

「併しな」と秋園子爵は膝を容れた。「血統断絶といふ事は畏れ多くも陛下に對して不忠に當りますぞ」

「其れでございませう、其れは……」と幾代は容を改めたが思はずほろりと涙を零した。

「悪い血統を遺す方が却て不忠ではございませうまいか」

「だから血統は其れとしてちやね」と栗林老人は口をもぐぐさした。此の老人は總入齒なので何かものを言ふ度に白い上髭と腮髭が際立って大きく動いて見え

る。

「血統は其れとして、他家から養子と嫁とを迎へたら什麼ぢや、純粹な血統の者が二人で夫婦になつて御當家を襲ぐと子々孫々も今後は悪い病人が出る事はあるまいて」

「其れが可い」と正臣は直ぐに應じた。

「其れでは他人に相續させるのでございませうか」と幾代は蒼白めた顔を上げた。

「爾だ、其れが可い」と正臣が繰返す。幾代ははらくと涙を流したが直ぐ手巾で眼を抑へた。

「私には子があります、正彦と萬龜子といふ二人の子があります、他人には相續させる事が出来ません、只だ此儘に、はい只だ此儘に親子一緒に滅んで行きたうございませう、浦島家といふ家は先祖から呪はれて居る家なんです、此上他人を引込んでまでも遺して置く程の家ではありません、其れに又華族といふ爵位や少し

ばかりの財産を當にして養子や養女に来る様な人なら却て爵位や財産を汚すばかりですから、此儘にして置くより致方が無からうと思ひます」
久満子は父の秋園子爵と眼を見合はせたが直ぐ立て亭の外から奥庭の方を眺めた。

「其れでは私を什麼するんだ」と正臣は唸つた。

「實に相済みません」と幾代は卓子に額が觸る様に首低れた。「私の様なものと御夫婦におなり遊ばしたればこそ此那お辛い目にお會ひなされるのでございます。併し其れは貴方許ではございません、私は什麼に辛い月日を送つて居ますかも御覽下さいませ」

正臣は黙つて腕を拱ぬいた。

「其れでは御當家は此儘にと仰しやるんぢやね」と栗林子爵がいふ。
はい」

「併し夫人、貴方は血統を絶したいと言はるゝが若し正彦とお八重に子が出来たら什麼なさる」

「えつ？」と言たが幾代の顔は臘よりも蒼白くなつた。

「其れは私の知た事ではありません」

「何故ぢや」

「私が最初からお止め申しましたのを貴方方がお勝手に決め遊ばしたのでございませぬか、お八重に男の子が出来ましたら仍且相續させるより他ございませぬまい」

一座は水を打つたる如く静まつた。何處かでけたましく百舌鳥が啼きしきると夕日の色は美しく背後の林を染めた。

二

亭の上で秘密の相談があつた時にお八重は正彦と夕餉の膳に向つて居た。頃日お八重は何といふ事なしに快活になつた。物に怖ぢる様な細心な態度が全く無くなつて、假令ば野中の一軒家に住む夫婦の如く大きな聲で語りもすれば笑ひもする、稀には女中共の蔭口を耳にする時もあるが彼女は少しも氣に掛らなくなつた而して彼女の眼は絶えず正彦に注がれる。什麼かすると正彦は終日普通の人の如く穩やかで快活な時がある、爾いふ日にはお八重は胸が踊るばかりに嬉しい。

「此の工合では全快の見込が無いではない」

彼女は恚う思つて益々良人の一舉一動に注意した。朝に床を離れる時には什麼午前には什麼、午後には什麼、活花や掛軸の四圍の色彩は什麼、遊戯や讀書や其日の天氣模様が腦に及ばず影響、凡てお八重は緻密に考へて少しでも効果の見えるのを待た。「屹度癒して見せる、屹度、く〜」

彼女は心に誓ひ神や佛に祈つた。爾してゐる中に彼女の心の中に毎も春の光が漲つた。什麼かすると餘り長い間正彦が眠つてゐる事がある。彼女は室内の掃除を終り、母屋から膳を運んで置いて、扱て疑と寝顔を睨めてゐる中に何となく淋しい氣が起る。

「早く起きてくれると可い」と獨りで思ふ事もある。食事の時には正彦は二つの膳を一つにして同じ膳に差向で食べる様にする、初めの中はお八重は何となく厭であつたが頃日は其れが常習になつた、美味いと思ふものがあると正彦は自分で食へずにお八重に薦める。お八重が食へるのを見るときも満足さうに微笑むのだ

が、頃日では爾いふ事がお八重の此上もなき樂みになつた。而して箸を止めて情々と正彦の顔を眺めるのであつた。

此日も二人は晴やかな心持で膳に向つた。

「お前は僕を愛してくれるね」と正彦は言ふ。恚ういふ質問は別に珍らしくもないがお八重は何となく耳が熱る様な氣がした。

「えい」とお八重は笑つて「什麼して其那事を仰しやいますの？」

「でもお前、言葉が直つたし、其れに美しい衣服を着たし指環や何かも穿めたから」「若様も私を可愛がつて下さいますのね」

「其れや爾ともく、僕はお前さへあれば何にも要らないんだからね」といふ正彦の眼は眞率の光に輝やいて居る。お八重は何とも言へぬ心持になつた。大人が子供を揶揄ふ様に解りきつた間を發して解りきつた答をさして其れを喜ぶのが罪深い事ではあるまいか。

りれども彼女は正彦の口から「お前を愛してる」といふ言葉を何十返でも繰返して聞きたい、而して自分でも口が酸くなる程言ひ續けて見たい。

「ねえ若様」と彼女は眼を濡まして言た。「どんな山奥でも可いから貴方とたつた二人きりで暮らして居たうございますわ」

「本當かい」

「えい」

「本當かい」

「えい」

「僕はねえお八重、僕は幸福だねえ」

箸をがらりと捨て、ところりと後ろに倒れたが、涙が二筋眼尻を傳つて畳に流れた。お八重も急に泣き出した。襖の開く音がして女中のお覺が一封の手紙を持って來た。

「お八重様、郵便でございます」
「難有う」と言たがお八重は不審の眼を睜つた、自分の許へ郵便の來るべき筈がない。受取て見たが差出人の名が書いてない。
「あら、誰だらう」

三

合點ゆかぬながらも彼女は封を切て讀み下した。
「お八重さん、私は銀杏林の中で幾度も御目に掛つた長次です、私は漸々の事で貴方は誰であるかを知りました。私は貴方に恩もなければ怨もない、けれどもお

秀には怨がある、私はお秀に五十圓の金を要求したが、貴方の御父様の宅平さんの病氣が又々起つたので醫者や薬でお秀には一文も無い様だ、無いものを出せと言た處で仕方のない話だから、貴方に頼むのです、お秀には貴方の事を話しません、誰にも話さないから安心なさい、其の代りに私の願も聽て下さい、私はどんなに苦勞して貴方の名前を探したか知れませんが、若し貴方が御返事がなければ私はお郎へ伺がひます。貴方の祕密は今ま五十圓だけの價值です。銀杏林で御目に掛ります。長次。」

手紙を持たお八重の手はぶる／＼と顫へた。

「誰の手紙だい」と正彦は起直つてお八重が引裂いた紙片を珍らしさうに覗く。

「お前の處へ手紙が來たのは初めてだね」

「はい、あの友達の……」

「男かい女かい」

「あのう男でございます」

なに？ 男？ どんない男？」と正彦は非常に驚いた様に息を喘ました。

「いゝえ、あの、友達の良人の人から妻が病氣だと言って……」

「あゝ爾か、其れなら可いよ、僕はね、お前が僕より外の男と話をしても手紙を贈答しても厭な氣持だよ、妻君のある男なら安心だね、あゝ僕は今ま變な心持になつたよ」

お八重は何にも言はずに正彦の引寄せに任せて其の胸に顔を押し付けた。いかにも正彦の心臓は烈しく鼓動して居る。自分より他には男と話をしても厭だといふ正直な自白は嫉妬といふよりももつと純でもつと深い言葉の様に思はれる。これほどまで自分を愛して下さるのに、つい其場凌ぎの嘘を吐いて済まなかつた。慙う思つてる中に、いやゝ何にも御存じないものを好んで不安を興へるにも及ばない、仍且嘘の方が可かつたとも思ふ。さりとして長次の難題を什麼切抜けやう

か、正彦に貰つた小遣は無論、指環や頭のものまで長次に與つて了つた。其れでさへ若しや感付かれはしまいかと戦々して居る今日、更らに五十圓、家中の人々の眼を竊んで品物を運ぶ事が什麼して出来やう。とはいふものゝ一旦秘密を握られた上は要求に應じなければ什麼な事をするかも知れぬ。良人、秘して男と密會し金品を與つたといふ事が解つたら人々の疑惑、若様の心配、其れがために順境に向つた若様の病氣が俄に顛倒へるのは眼に見えて居る。

お八重は初めて逃るゝ事の出来ない運命に陥ち込んだ事を覺つた。併し此時彼女の頭にむらゝと新な勇氣が湧き上つた。

「御父さんが病氣で其の醫者や藥代で困つてるお秀さんと虎さんの難義を救はないのは人間ぢやない」

彼女は活々とした眼をばつちり開いて室の一方を睥めた。ほやゝと白髪を亂した父が「恩を知らなきや畜生だ」と叱る様な姿が眼に髣髴く。不圖氣が付くと若

縁は自分の頬を幾度となく接吻しては心配さうに眼を睜めて居る。

「どうしたの？ お八重、黙つてちや詰らないね」

「御免下さいね若様」とお八重は嫣然して見せた。

「手紙の事が氣になるんだね」

「はい」

「お友達が病氣では心配だらう」

「はい」

「行てお出、見舞にね」

「いゝえ参りますまい」

「何故だい」

「若様がお淋しくなりますから」

「爾だね。」と正彦は首を傾げて「お前が居ないと淋しいな、然し僕が寝てからな

ら行ても可いよ」

「お寝みになつた後では私が残りでございますもの」

「爾だね、眼を覺ました時お前が居ないと厭だな、僕は眠つてる時でもお前が傍に居ると思へば嬉しいんだよ」

「ですから私は何處へも参りませんよ」とお八重はしみじみ嬉しく思つた。

「ちや慫うするが可い、見舞の金だけ届けてやれ」

「お金？」とお八重は心を見透かされた様に驚いた。

「いくら要るんだい」

「いゝえ要りません」

「併しお前の友達なら貧乏人だらう」

「はい」

「ちや僕はお母様に貰つて來やう」

「いゝえ、若様」とお八重は起上る正彦を制めた。

四

又してもお八重は秘密を作つた。

元よりお八重に貯蓄のあるべき筈がない、彼女の手にあるものとしては正彦に貰つたブラチナの時計と鎖だけである。これならば五十圓の価値はあるに違ない。

彼女は其れを帯に挟んで室を出た。

慥ういふ事は既に幾度も重なつたのだが、恐怖と羞耻さとは却て加はりこそすれ減りはしない。長次の様なものにもものを言ふのも無駄であるけれども言はなけ

れば氣が済まぬ。

「もう是つきりですよ」とお八重は言つた。

「大丈夫です、貴方の秘密は誰にも言ひません」と長次が言ふ。

銀杏林を出てお八重は吻と呼吸を吐いた、裏木戸を窃と開けて庭へ入ると何人も氣付いた様子もない。彼女は築山の背後を廻つて楓の並木から離室へ抜ける。第二の冠木門を押した。門の裏に門が掛けられてある。

「おや」と彼女は思つた。「夜番の爺やが閉めたのだらう」

慥う思つて二度三度揺ぶつたが仍且動かぬ、南天の下に潜んだ犬は底聲を籠めて唸り出した。

「私だよ」とお八重は言つた。犬は唸聲を止めて霎時黙つたが急に冠木門目掛けて飛んで來た。けれども門に隔てられた彼は只悲しさうな聲を出して彼方此方と走せ廻るのみである。此時お八重ははつと胸を轟ろかした。背後の楓林の奥に

男女二人の聲。

「確かに出て行たのよ」といふは久満子の聲。

「出て行たつて可いちやありませんか」といふは明の聲。

「可くはないわよ、屹度情夫が出来たのよ」

「其那事があるもんですか、お八重に限つて」

「貴方はお八重の事だと屹度辯護なさるのね、駄目ですよ、貴方が何と思つても

お八重の方で御免蒙ると言てるわ」

「其れちや本當に情夫があるんですか」

「そら少し嫉けて来たでせう」

「貴方も餘計な苦勞性ですな」

「私は嫉妬家よ、誰の事だつて嫉ける

「厄介な人だな」

「だから私に嫉かせない様になさいよ」

聲が近づくに従つて人影もちらちらと木間に動いて見える。

「此方へ来るんだ」とお八重はもう身體中を顫はして扉を推した。扉は依然鐵よりも堅い。もう此上は垣根を破るより仕方が無い、彼女は方々の闇に覗き初めた建仁寺の垣は整然として一糸紊れずに結はれてある。彼女は狂氣の如く其處ら中を手探りに掻き廻した、と木の根に躓いてはたりと横に倒れた。はつと思つてる中に扉が二つに開けて身體がするりと前へのめると共に門の中に入り込んだ。同時に扉が元の如く閉まつて其處に一人の影法師が立て居る。

「怪我をしませんでしたか」

「あら夫人！」とお八重は聲を擧げた。

「此方へ〜」と幾代は忍び聲で言て、泉水を離れた芝生の上の凳にお八重を掛けさせ、扱て自分も掛けた。

「いえお八重さん、私貴方に御願があるが、どうか聞いて下さいませんか」
「はい、夫人の仰ならん何事でも……」

「聞てくれる？」

「はい」

ではねえ、何卒正彦と貴方とは是までの縁だと諦めて下さり」

五

お八重は息が詰まる様に驚いた。

「奥様何と仰やいます」

「いえ、私にだけは秘しておくれでない」と幾代はしみじみと言った。

「正彦はあゝいふ身體で迎も人の良人となるべき資格がないのです、其れを金儲
づくで人様の娘を誘拐かしながら無事に済むと思つてるのは大變な間違ひです、
貴方だつて若い身空で狂人の御守で一生を暗く送らうと云ふのは什麼に辛からう
女は生れて四歳や五歳の頃からもう人形を抱いたり飯事をしたりお母さんになつ
たりお嫁さんになつたり、十一二にもなると子供心にも自分は什麼な人のお嫁さ
んになるだらうと遠いながらも臆に未來の良人を考へて居ます、誰にした處が女
に生れて良人を夢みない人があるでせうか、其れだけ生涯を賭けて樂い夢を見て
居るのに突然狂人の手に渡された貴方の心持を思ふと私は居ても立ても居られま
せん、あんな狂人の妻になつて……」

「奥様」とお八重は遮る様に言つた。「遠ひます〜狂人でも病人でも私は若様
を……」

「いゝえ」と幾代は静に溜息を吐いた。「貴方にした處が、二十二三にもなつて何處から見ても容色と言ひ氣質と言ひ點の打ち様がないのに、あんな狂人を良人として満足しろといふのは此邸の者共の大變な了見違です、貴方だつて決して満足すべき筈のものではありません、幼さい時から好きな男もあるでせう、約束をした男もあるでせう、爾いふ氣に入つた男があつた處で其れは何でもありません、貴方の罪ではありません、罪は元とく此邸にあるんです」

「まあ奥様……」とお八重は顔色を改めて向直つた。

「まあ、私に言はしてお呉れ、悪く思はれちや困るが、貴方の氣に入つた男があるなら、どうか今日から邸を出て、其の男と夫婦になつて幸福に暮らしておくれねえお八重さん、貴方が何れだけ正彦に親切にしてくれたか其れは皆な私が知て居ます、其の親切に對しても私は貴方を幸福にして上げなければ氣が済みませんどうか本當に幸福になつておくれ、其ればかりが私のせめてもの罪滅ばしです、

お金が要るなら幾何でも進げませう、頃日貴方が銀杏林で男と密會をしてるといふ噂がちら／＼耳に入つた時、私は什麼にか驚いたでせう、けれども後で能く考へて見ると其れも是も此の邸の罪でこそあれ、貴方に悪い事はない、今まで正彦を介抱してくれたお禮は何とも言ひ盡せないが、晴れて夫婦になりたい男なら私が親元にもなり媒介にもなり世話人にもなつて與げませう、正彦が可愛さうだが、狂人でありながら眞人間を女房にしようといふ了見が既に罪惡なんだから其れは諦めさせます、私は正彦と萬龜子とを伴つて旅から旅へ神社廻りでもして三人が人里離れた土地で死にたいと思ひます、私は暗の國から暗の血を稟けて生れた者ですから什麼なつても構はないが、貴方は明るい國に生れて明るい血を稟けた女です、お互に國が異ふのですから御別れしなけりやなりません、ねえお八重さん、私には秘す事がない、どうか打明けてね……幸福になつてね……稀に正彦や私達の事を思つたら可愛さうな親子三人が何處かの神社の廣前で貴方の幸福

を祈つてると思つてね、ね、ね、……」

両手を胸に當て、泣くまじと努めつゝも休へかぬる斷腸の氣色が痛ましく見え
た。お八重は聲を擧げて泣いた。

「餘まりですく、奥様餘まりです、私は……私は……情夫があるなんて其那私
だと思つて被居やるんですか、他の人は兎も角、奥様だけは私の心を知て被居や
ると思つて居ましたに……奥様、私は奥様をお恨み申します」

六

霎時泣いてお八重は又續けた。

「いくら何でも私は若様を嫌つて他の男に心を移す様な其那女ではございませ
ん、どういふ譯か私は若様のお傍を離れる事が出来なくなりました、私の様な者
でも心底から可愛がつて下さる若様に私は何の不足がありません、御病氣も段々
快くおなり遊ばし、時には普通の人以上にも氣が確で被居やいます時もあります、
其れをお邸中の方が二言目には狂人、と被仰やいます、廣い世界に御母様とお
八重より他に味方が無いと平常に仰やつてるのを聞くに付け私はもう死んでも若
様の御傍を離れまいと決心しました。何も御縁です、華族様にお生れ遊ばしなが
ら彼あいふ病氣にお罹り遊ばした若様もお可愛さうなら卑しい豆屋の家に生れた
私も可愛さうではございせんか、世の中に可愛さうな者が兩人、憊うして夫婦
になるといふのはよくくの御縁だと思ひます、假令御氣分が普通でないに致し
ました處で、私を可愛がつて下さる事だけは確でございします、正氣の人よりも
つとく深いお情です、其れを奥様、私が若様を捨てる事が出来るとお思ひ遊ば

すんですか、豆屋に生れても父は武士です、相當の教育もあります、何んでく私はその犬畜生の行爲を致しませう」

「急き込みくは息も窶み涙が流れて、言ふ語さへも前後の秩序がない、幾代は一句くは氣を付けて静かに首肯いた。」

「解りましたお八重さん、私が悪かつた、私が貴方を疑がつたのは悪かつたけれども……」

「奥様！」とお八重は叫んだ。「私が隠れて男に會ふ事に就て御訊ねになるんでございませうか、其れは言へません、奥様、其れは何れにしても言へません、他の方なら存じませんが、奥様だけは私を信じて下さる事と存じます、私の身體は潔白です、私は決して若様の御親切に背く様な事は致しません、只だ其れだけを御信じ下さいませ、ねえ奥様、其れでも御信じ下さらないのでございませうか」

「勘忍しておくれ」と幾代は涙聲で言た。「ねえお八重さん、貴方は何處までも私

の嫁です、其れを疑がふなんて私は貴方の美くしい心に對して耻ぢ入ります、貴方だつし親御がある、其れに就て男に會はなきやならない用向もおありでせう、ねえお八重さん、私が幾重にも謝罪ります、どうぞ本當に私の嫁になつておくれ、私をお母様と呼でおくれ」

「お母様」とお八重は怯びれもせず突如幾代の膝に凭れた。

「おうお八重」幾代はお八重の背中に突伏して同じく涙に暮れた。

「さあ晩い様だからもう寝ませう」

「はい」

「正産も一人で若し眼覺めると淋しいだらうから」

「はい」

「さあ行きませう」

「はい」と答へたがお八重は未だもぢくして居る。

「什麼かしたのお八重」

「あのお母様」

「なあに？」

「私もう一つ申上げたい事があるんですが」

「どんな事なの？」

お八重は崩折れて耳根を染めた。

「どうしたの？」と幾代は優しく寄添ふ。

「あのお母様、私はね、私は只の身體ではない様でございますの」

「えつ」と幾代は反りかへる様に驚いて「妊娠？」

「はい」

「到頭爾なつ」と幾代は落膽して再び凳に腰を落したか直お八重の手を取て頭

を低れた。

「あゝ何といふ情ない事でせう、孫が出来ると聞いたら何を扱置いても喜ばなけりやならないのが普通の母親なのに、私はく私は却て孫の出来るのを呪はなけりやならないなんて、世の中に私ほど不幸なものはあるでせうか」

二人は手を取り合つて泣いた。

七

歡喜は虎吉の周圍に溢れた。無料宿泊所は日増に設備が整うた。有志者の義捐、各教會の寄附、其れだけでも維持が出来る様になつたけれども、虎吉は少しも油斷しなかつた。「皆さんの志を受けるに付けても俺は怠けちや濟まねえ」彼は毎

も慙う言た。町内の若い者は彼を親分の如くに敬ふ、慙ういふ單純な社會は只だ彼の眞面目な心だけに對しても隨喜の涙をこぼした。

踰跲として野良犬の如く疲れきつた者が、今にも死にさうな聲を出して宿泊所に来る、一日や二日で全然變つた人の様に元氣づいて新たな職業に出て行く様になる。而して幾十返となく御禮を繰返すのを見ると虎吉は毎も涙ぐむで喜こんだ。「嬉しからうな、爾だらう、俺も嬉しい、」只だこれだけの言葉も人々には神の言葉の如く聞えた。けれども中には左までに困らない者でも怠けたい處から一日遊んで食ひ倒しに宿泊所へ來るものもある、其れと解つても虎吉は拒まなかつた。「あゝいふ奴は、食はしてやらなけりや泥棒でもする奴だ、泥棒させるより食はしてやる方が可い」

此頃では宿泊所と稱ぶ者はない。誰が言ふとなく「なさけ宿」と號けられた。「なさけ宿、全く好い名だ」と虎吉は言た。「世の中には何が大事だと言て情ほど

大事なものはない」

一日働いて汗水くになつて夕飯を済ますともう一日中の天國！ なさけ宿を一回して家へ歸り、宅平、お秀、お徳と四人で他愛のない子供らしい遊をして笑ひつ騒ぎつする。

其は冬の日であつた、虎吉は例の如くゆつたりした氣で店の灯に照らされ行く市人の光景を眺めて居た。彼はなさけ宿が満員勝で何かと不自由だから什麼かして建て増をしたものだと思つた。臺所ではこつこつお秀が皿や小鉢を洗ふ音を立て、居る。臺所と茶の間の障子の間に一つの電燈を吊て兩方を明るくして居る。其處にお秀の頭が見える。大きな丸鬚の根が少し弛んだのを無理に撫で付けて保たせた鬚は後れ毛だけは流石にごまかす事も出来ぬらしい、二條三條亂れて頬に絡んだ横顔は眞直な繪に畫いた様な鼻だけが、かつきりと見える。襷を掛けて二の腕まで露はした指の先が絶えず皿や茶碗の上を極めて敏捷に動い

てちや、いんくといふ静な音を立てる。折々お秀は弗と手を休めて虎吉の方をちらりと覗く。而して又慌て、元の如くに皿を拭く。

「美しい女だな」と虎吉は思つてにやりとした。

「お秀お前は丸鬘を結たんだね」

「あら」とお秀は半分顔を障子の傍から出して笑つた。「今ま氣が付いたの？」

「あゝ爾とも、何時丸鬘にしたんだい」

「もう去年からぢやないの？」

「去年から？ あゝ爾かい、實に驚いた」

「何を驚いたの？」

「何をつてお前、其那大きなものがお前の頭に乗るとは今まで知らなかつたんだ」

「まあ」と言つた時お秀は急に飛立つ様に床の上に駆け上がった。

「什麼かしたのか」と虎吉は其の駆け上りざまの滑稽さににやりと笑つた。

「いゝえ什麼も」とお秀は力なく言ふ。

「何か来たのかい」

「えい……犬が」と答へるお秀の聲は慄へて居た。

「弱蟲だな」と虎吉は限りもなく笑つた。

八

「なあお秀」と言つた時お秀の姿が見えぬ。「水でも汲みに行たらんだらう」

慄う思つて虎吉は霎時其を嗅かした。「彼奴め丸鬘を結つてやがる。俺は什麼し

て其れに氣が付かなかつたらう、丸鬚つて奴は亭主持の看板だてえが、ふうん亭主持か、ふうん、全くだ、俺は彼奴に随分惚れたもんだ、は、は、いや早什麼も面目ねえ」

額をひたりと叩いて「ハツ／＼／＼」と笑ふ。

「今晚は」と表に聲がする。

「おい誰だ、三的ぢやねえか」

「あ、俺だよ、寒いな今晚は」

「うむ、まあ當れよ」

小柄できび／＼と纏つた顔をした三吉は長火鉢の向に胡坐を掻いた。

「あ、坊やは能く寝てるね、小指は？」

「水でも汲んでるんだらうよ……だがねえ三ちゃん、俺は今日初めて燗が丸鬚を結てたのに氣が付いたよ」

「馬鹿だなお前は」と三公は笑つた。

「だからさ俺も馬鹿だと思つてるよ、何しろねあの丸鬚を結はせるまでには随分苦勞をしたもんさね」

「撲るよ此畜生」

「惚氣ぢやないよ、本當の事ぢやねえか」

「本當の事が惚氣に當るのわ」

「おい可い加減にしろよ」

「まあ聞てくれ、俺は實に此頃は不思議でならねえんだ」

「何か？」

「何がつてお前、今まで氣が付かなかつた事が幾つも／＼眼に留まるんだ、早え話はね、そら彼處に坊やが寝てるだらう、面白いぢやねえか」

「子供が寝てたつて何も面白いと斷わる程の事でも無えぢやねえか」

「だつて考えて見ねえな、俺が怒うして長火鉢に坐つてると、唄の奴が向合つて坐るだらう、而して二人で子供の方を見るだらう、子供は人形の相撲の様な手を出して眠てるだらう、其れを見て又た二人は顔を見合はすだらう」

「止せよ、馬鹿」

「まあ聞けよ、ねえおい、婢の居ねえ時でも子供の枕の側に婢の木枕が轉がつてゐる時があるんだ、木枕てえ奴は乙なもんだよ」

「こん畜生ッ、俺が黙つてると思つて種々な事を吐かしやがる」

「お前も解らねえ奴だな、此間ね婢が風邪を引いたんで一日寝たんだよ、氣の毒だと思つて俺は襦袢の洗濯をしてやつたんだ、其れを縁先の竿に掛けた時、彼奴はね、どうも済みませんと言たかと思ふとほろ／＼涙を零して枕に突伏して了つたんだ、俺は其れを見ると悲しくなつて突如彼奴の……」

「やい、馬鹿野郎」と三公は立上がつた。「俺は歸るよ」

「まあ遊んで居ろよ、緩くり話すから」

「籠棒め、此の上緩くり話されて堪るもんか」

「ぢや話さない」

「婢の事を言はなきや居てやる」

「うむ言はない」

「よし」と三公は胡坐を掻き直し。

「何か御茶受を出しねえ、畜生ッ只で惚氣を聞かしやがつて、お前ほど度胸の可い奴は無えぞ」

「爾かね、俺は其那に思はねえよ、だがねえ婢の奴は……」

「おいッ」

「なる程、言はねえ積だつけな」

「處で水を汲みに行たにしても馬鹿に遅いちやねえか」

「爾だね」

「はてな」と三吉は首を捻つて、しげくと虎吉の顔を眺めた。

「おいどうしたんだ」

「どうもしねえけれどもな」と三公はもぢくして、「今彼處の處で男と話をして居たのは爾ぢやないかしらん」

九

「男と話をして居た？ なさけ宿の奴だらう」と虎吉は何氣なく言ふ。

「さあ其れがね」と三公は益々もぢくする。

「什麼したてえんだよ」

「いや何でも無いんだらうがね、なあ虎さん、お前此頃婦さんの様子が變だと思はねえか」

「何がさ」

「どつか今までと異つて居やしねえか」

「はッくく」と虎吉は笑ひ出した。「冗戯ぢやねえ、今から姪娘になられて堪るものか、俺あ當分小兒は作えねえ積だよ」

「其話しぢや無えんだよ」と三公は當惑して、「まあ可いや後日緩くり話さう」

「何を言てるんだ、お前今日は餘程變だよ」

「何が變だ」

「お前の言ふ事は解らねえ」

「今に解るよ、だがねえ虎的、氣を付けなよ、俺だつてお前の兄弟分だからな」

虎吉は仍且にこゝく笑つて居る。

「三公、何だか知らねえが心配事があるなら言て了へよ」

「いや言はねえ」

「何故だ」

「何故でも」

「勝手にしろ」と虎吉は怒鳴た。

「うむ勝手にすらあ」と三公が言た。而して立上つて霎時腕組をしたが直ぐ又た座り直した。と兩方の眼に涙が充滿に堪まつて居る。

「なあ虎的、お前と俺とは兄弟分だな、俺はお前にも恩があるがお秀ちゃんにも世話になつた、何方が重いのが軽いのかといふんちやねえが、俺あ口惜しいから言ふんだ、お前は知るめえがお秀ちゃんには折々裏の物置小屋の前で男と嬉曳してゐるんだ」

「はッくく」と虎吉は又もや笑つた。「馬鹿な事をお前、はッくく、馬鹿な事を何と言てるんだ、はッくく」

「何を笑ふんだ、可笑しくもねえ、蟻が淫奔をしてるてえに笑ふ奴があるか」と三公は中腹で言ふ。

「馬鹿を言ちや不可えせ、お秀が姦通をしてるなんて、其那事は世界が顛倒返つたつて無え事だ、えいおい、彼奴あ俺に惚れてるんだぜ、俺も彼奴に惚れてるんだ、相惚てえ奴だ。頃日も爾だ、彼奴は恚う言ふんだ、若しも何かの事情があつて貴方と私と別れなきやならない様な事になつたら私は乾度死んで了ふわ、死ぬのは仕方がないけれども後に貴方一人が生きて居るかと思ふと其れが氣になつて死にきれないわ。恚う言てほろく泣いてやがるんだよ。だから俺は恚う言た。

お前の死ぬ時は俺の死ぬ時だつて……」

「馬鹿ッ」と三公は涙聲で怒鳴つた。

「涕垂奴！野呂間、でれく野郎のぐにやく坊主！町内で知らぬは亭主てえ事を知らねえか、えいおい、俺は恚う言ふからにや證據が無くちや言はねえんだ」

「證據があつても其れや嘘だよ。お前は今日は餘程氣が變になつてるよ」
「確乎してくれ」と三公は火鉢の縁を兩手で攫んだ。「俺だつてお秀ちやんに限つて其那事は無えと思つた。けれども過日産婆のお早に逢つたらお秀ちやんが毎晩の様に裏の物置小屋の前で男と會つてると恚ういふんだ、篋棒えお秀ちやんに限つて其那事があるもんかと怒鳴てやつたが、猶ほ念の爲だと思つて俺は彼處へ行て見たんだ、三晩といふもの忍び込んで待てるると漸と現場を見付けたんだ」

「なに？」と虎吉は小首を傾げた。

「人達だらう」

「いや人達ちやねえ、確かにお秀ちやんだ」

「本當か？」

「本當とも」

「いや人達だ」と虎吉は平氣に衰を吹いた。

十

「人達ちやねえよ、確かに見たんだ」

「なさけ宿にや男が許多も居るんだ、立話位はすらあな」

「なさけ宿に居るような男ちやねえ、髭を生やしてるせ」

「は、猫だつて髭を生やしてるよ」

「爾ちやねえよ、外套を着て指に指環を嵌めて……」

「近所の人だらう」

「俺は三晩ほど見たんだ、毎も同じ男と會てるのは變ぢやねえか、其れに其の話がよ、顔は髭の處しきや見えねえが、ちよいと高聲になると聞えるんだ、縁を切つてくれ、祕密を發くのは、いつそ夫婦にならうのと種々な言を吐かすんだ」

「ふうむ」と虎吉は初めて不審の眉を擧げた。

「お秀が？ 豈夫！ いや決して爾那事はありやしねえ」

「あるから仕方が無え」

「もう止せよ」と虎吉は苛立たしく怒鳴た。

「まあ考えて見ろよ」と三吉も言ひ返す。

「考えるまでも無え事だ、俺の嬢は俺が保證するんだ、これほど確かな事はあんめえ」

「だからお前は馬鹿だといふんだよ、えいおい虎的、確乎してくれ、お前一人の恥

ぢやねえんだ、これが世間へ知れて見ろ、俺だつて顔出しがなりやしねえ」

「止せつたら止せ、お前が何と言つて俺あ取上げやしねえ」

「涕垂しめ！」と三公は立上がった。

「俺あ今日から兄弟分の縁を切るから爾思へ」

「仕方が無え」と虎吉は土瓶の溢茶を湯呑に酌いだ。

「馬鹿野郎！ 涕垂奴！ 骨抜鮎のふにや〜野郎！」

チエツと舌を鳴もしたかと思ふと其儘ふいと飛出してつた。

「仕方が無え」と虎吉は再び繰返した。霎時黙つて電燈を見詰め、其れから眠つてるお徳の頬に窃と接吻して立上りさまに開け放した臺所の障子口を見やる。

「何をしてるんだらう」と口の中で言たが、其れと同時に妙な不安が起つて來た。

慄ういふ問題の矢先にお秀が顔を見せてくれたら直ぐに胸が清々する事だらうが未だに歸つて來ないといふ事は何となく自分を苛らし立て、でも居るかの様な氣

がする。

「疑ぐつちや濟まねえ」と彼は思つた。爾思つてる中に何だか氣が沈んで胸に波が立て来る。

「おうい〜」と彼は戸外の闇に向つて叫んだ。

「はあい」

闇の中から先づぶら〜動く手桶が見える、次で足先、次は顔。

「どうしたんだい」

「はい、あのう」

虎吉は長火鉢の前に戻つて胡坐を掻く。がたびし戸締の音をさせて其れからお秀は前垂に手を拭きながら出て來た。虎吉は室中が急に光に満ちた様な氣がした。

「は〜、〜、〜」と彼は笑つた。お秀はびくりとして敏く良人の顔を窺み見、靜かに炭をつぎ初めた。

「は〜、〜、三公の奴今變な事を言たもんだからね、俺あ厭な氣持になつたんだよ、これが其の何だね、嫉妬てえ奴だね」

「えつ？」

「だが馬鹿に長えもんだから 水汲みに行つてよ……三公はね、慥う言ふんだよ お前に男があるんだとさ、ちよい〜物置小屋で會つてるんだとさ。は〜、〜、〜 髭を生やした紳士だとさ、えいおいお前今其の男と話をして居たのか」

「えい」

「誰だ、えいおい三公が爾言たもんだから俺の鼻に限つて其那事は無えとてや つたんだ、するとな、彼奴め怒りやがつて兄弟分の縁を切ると慥う言ふんだ」

「兄弟分の縁を？」とお秀は眼を擧げた。

「兄弟分の縁を切られたつて俺は婢を疑ふ譯にや可かねえと恚う言てやつたんだ、するとね彼奴め蕪弱のお化みたいにぶり／＼怒つて歸りやがった、はッ／＼／＼一體男てえのは誰だい」

「誰でもないのよ」 お秀は殆んど偶然に言た。

「髯の生えた男かい」

「えい」

「何處の人だい」

「知らないわ」

恚う言たがお秀は颯と顔を染めた、ほんの一瞬间、此の一瞬间に殆んど無意識

に一種の言葉が迸り出した、恚う問はれたら恚う答へやうと待設けたのでもなければ、嘘を吐いて當座を凌がうと考へた譯でもなかつた。知つてる男を何故知らないと言たかと問ふものがあつたらお秀は何と答へやう。只偶然！ほんの一刹那の聲！爾だ、言葉ではない「聲」である。此の聲は「知らないわ」と言ふのも又た「知てるわ」と言ふのも殆ど同じである。如何となれば其れは意識なくして出た聲であつたからである。併し其の聲は果して根抵のない聲であらうか。

「幾度も來るのかへ、其の男は」

「えい、水を汲みに行くど何處からともなく出て來ますわ」

「お前に惚れてるんだな畜生め、だが何の話をするんだ」

「何と言て取留のない話よ」

「取留のない話？其那奴は横面撲り倒してやると可んだ、何處俺に知らせねえんだ」

「だつて貴方は氣が短いから……」

「爾だな、俺が見たら屹度撲り殺すに遠え無え、今度來たら知らしてくれ、ふん
掴めえて三公の處へ連れて行てやるから」

「えい」

慙う答へてお秀は火鉢の灰を掻きならしたが其手は烈しく慄へて居た。彼女は
何時の間にか自分が一言くくと嘘を吐いて行く事に氣が付いたのである。

「女てえものは詰らねえもんだな、ちよいと男と立話をしても種々な事を言はれ
るからな」

虎吉は大眞理を發見したかの如く酷く自分の言葉に感服して幾度も繰返した。

「だがねえ俺は本當に済まねえ事をしたよ、嫉妬つて奴だねこれは……お前を疑
ぐりやしねえけども爾いふ話を聞くと餘まり心持の好いもんぢやねえよ、して見
ると俺は長次にも済まねえと思ふよ」

「どうして」とお秀はちらりと眼を配つた。

「どうしてつてお前、長次は死んだから好い様なものゝ、生きて居てさ、お前と
俺と慙うなつてると聞いた日にや什麼に口惜しからうな」

「貴方と」お秀は怯々聲で言た。「若し長次が生きて居たら什麼して？」

蒼白めたお秀の顔は決心の底力に顫へて居た。

「什麼するつて何だい」

「貴方と私は什麼なるでせう」

「うむ」と虎吉は詰まつた、兩人は霎時沈黙した、とお秀はもう額に兩腋に汗を
掻き初めた。「私は何といふ罪が深いんだらう、今言た私の言葉は良人に對する探
偵の様な言葉だ、私は慙うして段々卑劣な女になつて行くのだ、私は嘘を止めな
きゃならない、どうしても眞人間の道を踏まなきやならない」

新らしき勇氣は油然として湧き上つた。彼女は臆面もなく良人の方に顔を向け

た。

「ねえ貴方、私は……」

言ひ續けやうとする途端に虎吉は唸つた。

「別れるんだね、長次の嬬は長次に返さなきやならねえ、待てよ、爾なると俺な
んざあ生きて居ても詰らねえから死ぬんだ」

「本當に？」

「死ぬとも、死ぬてえ事は大した事ぢやねえんだよ、はッくく詰らねえ事を
考えたもんだ」

「貴方が死ぬば私も死ぬわ」

「爾だらう、俺が死んだらお前も屹度死ぬね、俺も爾思ふよ、爾すると坊やは……」

「坊やは？」とお秀はもう何にも言へなくなつた。而して「あゝ長次が生きてる

事を言はなくつて可かつた」と思つた。

十二

眼が廻る程忙しい中にも虎吉は月の半ばの一日だけは仕事を休んで緩くり遊ぶ
事にした。お徳のお宮参りも碌々した事がないから鬼子母神へ行かうと虎吉は言
ひ出した。宅平を留守番に三人が鬼子母神へ参つた。

石畳の上に落葉が降りしきつて疎き日射が冬木立の間を泳いで居ると、本堂の
柱冷たく古寂びた葺となく破風となきものゝ隙間から幾十羽の鳩が人を見て飛ん
で来る。

「さあ坊や、拜むんだよ、むにや〜」
お秀はお徳の両手を合はしてやつて拜んだ。虎吉も一心に拜んだが、懸て首を捻
つて考へて居る。

「體鬼子母神てのは何の神様だ」

「小兒の神様よ」

「ふうむ、だつて鬼子母神て奴は小兒を食ふさうぢやねえか」

「あら奴なんて言ぢや不可いわ罰が當るわよ」

「爾か、ぢや失敬」と軽く頭を下げる。

「鬼子母神様はね、小兒を食つて仕様が無いからね、如來様が鬼子母神の小兒を
奪て隠したのよ、爾すると人の小兒は食つても何とも思はないけれども自分の小
兒を隠されて見ると、もう悲しくて〜堪らなくなつて泣いてばつかし居たのよ」
「ふうむ、其の涙があゝの柘榴になつたといふ譯だね」

「爾ぢやないわよ、柘榴は小兒の身代に獻げるのよ」

「木で作えた柘榴だから幾ら鬼子母神でも齒を立ちやしめえ」

「あら、柘榴は人間の味がするからよ」

「お前食つて見たのか」

「食べやしないわ」

「なる程」と虎吉は妙に感服して「して見ると何だね、鬼子母神て奴は其の小兒
を隠されてから改心したんだね」

「えい」

「太え奴だな、散々ばら人の小兒を食つてさ改心も無えもんだ、他人の小兒だつ
て己が小兒だつて同じぢやねえか」

「爾怒つても仕様がないわ、私の知た事ぢやあるまいし」

「世の中に何が憎いと言て小兒を苛める奴程憎いものはないね、ねえ坊や、ほう

ら笑つてるよ、おい、坊やは笑つてるよ」

お秀は急に黙つて俯向いた。と見ると涙がじみじみと兩眼に湧いて居る。

「おい何を泣くんだよ」

「でもねえ、此の子が」

「此の子が什麼したてえんだ」

「貴方の子でもないのに貴方が此那に可愛がつて……」

「馬鹿ッ俺の子だ、何を吐かしやがるんだい、さあ行かう」

「虎吉はお徳を抱て先に立ち石疊の路を左に迂餘つて細路へ下りた、と右手の冬並木の片側路から静かに現はれた一人の婦がある、其れはお八重であつた。彼女はお徳を抱き上げた虎吉の姿と其れに添うて銘仙の羽織を着た大丸鬚の嬪やかなお秀の姿、擦れくになつて笑ひつ語りつ小兒をあやしつ歩き行く。お八重は何時までも見送つて居た。」

縁

一

春四月、浦島子爵は庭の築山に上つて四方を眺めた、遠近の櫻は彩つた雲の如くに處々に見えて、百萬の人家の起伏が晝の霞に隠れては又た現はれる。

「實に佳い眺ぢやな」と子爵は家令の久保田を顧みる。

「御意にございまする」

「彼處に見える森は何ぢや」

「あれは赤城の境内にござりまする」

「うむ爾か、其處にある其れは何ぢや」

「何れにござりまするか」

「其れぢや」

指さしたのは宅平の物干場である。

「あれは其の物干にござります」

「あんな卑陋なものがあつては風致を害するぢや、何故取拂はせんか」

「御意にござりまするが彼れは中々取拂ふ事が困難でござります」

「何故ぢや」

「彼の家はお八重様の親父の所有でござります」

「うむ豆屋とは彼か、お八重の親父なら猶更の事ぢや、當家の恩を受けてるから

喜んで命令に服するぢやろ」

「ど、ど、どう致しまして」と久保田は眼を圓くして「華族と金持は七生までの

敵だと言てる位でござりますから」

「併しお八重の……」

「いや飛でも無い事でございます、お八重様が御當家に居るといふ事は親父には絶対に秘密でござります、若し其れを聞きましたら親父め屹度取戻に参ります」

「取戻に來たら返してやるが可い」

「其れでは正彦様が……」

「成程爾だな」と子爵は首肯いて「併しあの物干は目障りだな、何だ彼處に掛つてるのは」

如何にも子爵の眉を顰むるも無理は無い、ぼろくの股引、猿股、絆纏、醬油で煮しめた様な襦袢の様なものや禪の様なもの、宛ら古着屋の如く數限もなくぶら下げられて、乾いたものは景氣能く半天に翻つて其等を吹いた餘り風が子爵邸の花に吹き込んで來る。

「ベッ」と子爵は唾を吐いた。

「其れに御上、此頃はあの無料宿泊所が出来ましてから、貧乏人の洗濯物を残らず彼處へ干しまするのであの通り多ござります」

「無料宿泊所? どうして其那汚ないものを此の近くへ作らせたんだ、可しッ今に取拂はしてやる、此界限を不殘立退かしてやらう」

子爵は中腹になつてぶつ／＼言ひながら中庭の方へ歸つた、歸つたものゝ扱て何といふ用事もない、彼は詰らない顔をして縁に腰を下した。此の詰らない心持は去年から引續いた心持で、彼と夫人とが別居の妾となつてから一層淋しさを増した。

基にも倦き將基にも倦き、球突謡曲藝者狂わゆる娛樂も彼に取ては面白くない。嫡子は狂人で妻は引籠つたきり顔も見せぬ、恚う思ふとしみ／＼と情たくなつて来る。けれども彼は什麼すれば此の不幸が轉じて幸福になるかを考へる勇氣もなかつた。

暗い／＼心持で凝と考へてる中に久満子の姿が見えた。子爵は微かに笑を含んだ。

「おい久満さん、お前は什麼思ふ、彼處に下の家の物干が見えるだらう、あれを取拂ふ工夫はなからうか」

「ありますわ」と久満子は狎へる様に伯父を見上げ「懸賞?」

「うむ、懸賞にしてもよろしい」

「何の懸賞?」

「は、／＼子供だねお前は」

子爵は毎も久満子を見る度に「子供だね」と言ふ。而して言はるゝ度に久満子は頗る快い氣持で急に若返つた様な氣がして狎へて見たくなる。恚ういふ時の久満子は明と痴話の舌頭に火を點する久満子と全然別人である。

「何を下さるの?」と媚を送つて首を捻る。

「お前の好きなもの」

「どんなものでも？」

「うむ、明君との結婚費位は持てやるぞ」

「本當ですね」

「本當とも」

「ちや考へるわ」

「さあ考へてくれ」

「爾仰しやられると考へられないわよ」

二

「さあ什麼だ」と子爵は面白さうに言ふ。

「あゝ可い考があるわ」

「何だ」

「其りや素敵よ」と久満子は大袈裟に言ふ。

「早く聞きたいな」

「では言ひませう、富士山を築る事よ」

「富士山？」と子爵は驚いて黙つたが、驚て手を拵て威嚇した。

「豪い、實に豪い、富士の白雪を以て汚ないものを隠すとは妙案ぢやね」

其日から子爵は設計に夢中になつた、技師を呼ぶ土方を呼ぶ、測量、製圖、繩張の事まで自身で世話を焼き出す。恚ういふ人の性質として仕事に取掛ると凡て

の人を自分の仕事の渦巻の中に引込まなければ承知しない、邸中は養えくり返る騒ぎになった。淋しき家庭に身體の置處もない子爵は、此の大工事の爲に急に活氣づいた。

外の騒ぎは更に甚だしい、今までの石垣を毀して路を造る、幾十人となき労働者はさしにも廣き邸内に蜘蛛の子を散らすが如く往來する、馬は嘶なく、牛は吼える、人夫の唄は朝から晩まで續く。

「景氣が好いな」と子爵は大島紬の裾を引摺つて測量の竿を杖に彼方此方と歩き廻る。邪魔だとも言いかねて人夫の迷惑言はん方ない。

更に迷惑なのは垣の下の人家である。其中最も打撃を受けたのは宅平の住居と無料宿泊所である。垣根は壊される、空地と言はず井戸側と言はず、荷馬車が遠慮もなく引込まれて宛がら戦場の様、加之ならず丸太棒が勝手に軒に立てかけられる、大きな切石が時として土と共に轉がつて来る。

「畜生め」と宅平は切齒して怒つた。

「華族の奴め、此の繩を踏み越すなら越して見ろ」

彼は棒杭二本を立て、繩を張り渡した、けれども其れは瞬く間に取拂はれた。

「地所は此方の所有だ、ぐづく言ふと立退を食はせるぞ」と浦島家と言ふ。

宅平は益々怒つた。「地所が其方の物でも家は此方の物だ、家に觸ると承知しないぞ」

朝から晩まで宅平はなさけ宿の窓から人夫共を睨んで居た。

「面白いやつてやれ」となさけ宿の者共も相手が華族だといふので一同心を合はせて監視する、丸太棒一本でも、土車の楫でも觸つたら承知しない。其の口八釜しきは言語に絶して居る。

相手が生命知らずの漂浪者だから敵はない、撲れば膏藥代が要る、華族といふ身分があるので迂濶な行爲も出来ない

「箆棒め、庭の中に富士山を築えて樂むような要らねえ錢があるなら、なさけ宿にでも来て来い、馬鹿にしてやがる本當に、手前達が道樂に築える山の下に、虎さんが汗水づくになつてなさけ宿をやつてるの知らねえか、穀潰しの罰當り奴」
これには浦島家でも閉口した。

「なに抛とけ、私に考がある」と子爵は久保田に言った。
二三日経つと、町中の人が肝を潰す様な騒が初まつた。其れは町の大通から掛けて地の底を掘り出した事である。深さは二丈餘り其れが宅平の裏へ行くに従がへて益々深くなる。宅平の床下は恰がらに隧道の様なものとなつた、其處に鐵軌を敷いて朝から晩まで土車を轉がす。宅平の家に居ると雷鳴地響に坐つた際も跳ね上げられる様！
これには宅平開いた口も塞がらなかつた。

三

浦島家と貧民共の衝突は愈熾になつて來た。約百人もある大工木挽石工馬夫士方共は浦島家の權威を恃みに傍若無人に振舞ふ、唄を唄ひ関の聲を擧げて隧道を潜り普請場を走り廻りお秀が水を汲みに來る毎に猥褻がましい悪口雜言を浴びせかけ小石を抛りつける。此ために近所の婦人共は滅多に水を汲まぬ様になつた。のみならずなさけ宿の入口の横合から泥水が溢れ出して其處ら一面泥の海となり足の踏み所もないと言た風、日向の部分は兎も角日蔭の部分になると七日も八日も水に浸かつて壁に地圖の様な汚點が出來て居る。苦情を持出すと下水の溜掃除は其方の義務だと言返される。東京に廣大な屋敷を有て居る富豪は數々あるが、此の廣い屋敷のために町と町との交通が遮ぎられ飛んでもなき廻り路をしなければならぬ處が多い、而して恁ういふ廣い邸宅を圍んだ長い塀のために片側は全く日

蔭となつて霜解頃には學校通ひの小兒を泣かす事になる。其れでもお邸では一向お構ひなく正門の方面だけには砂利を敷き詰め舗石を並べ立てるが、裏門や横路は殆んど知らぬものゝ如くして居る。晝は其れでも可いとして夜になると例の高塀と庭園の樹木とで山城でも出さうに眞暗である。其れすら電燈を點けないので婦人子供の不便言ふ計りない。

此の苦情は音羽の住民が既から浦島家へ申込んだ宿題であつたが、今度の普請で、掘穴から汲み出した泥水が一面に流れて大通の窪地へ溜り込む、其處にはんの印ばかりに油煙臭い瓦斯燈の首だけを轉がして置くのだが、其れは灯の點つて居た例はない。往來の人々の難儀は更なり虎公の魚店は泥水に隔てられて客足も従つて減る許である。猶ほ其上に牛車馬車に道路は滅茶く荒らされて隧道に通ふトロツコは遠慮會釋もなく家並を震動させる。

「やつつけなきや不可」と宅平は首を捻つた。なさけ宿には東西を股に掛けた生

命知らずの風來人共が揃つて居る。彼は窃かに一同を自宅に集めた、風來人の他には左官の三公、八百屋の豊公を初め近所の若者共も五六人はある。

「諸君！ 御苦勞く」と宅平は議長の格で言た。彼は丁度三十年前に大井馬城や新井章吾等と國事犯を企てた當時の若い心持になつて、天下の大政治家といふ様な態度で成るべく鷹揚に構へた。

「諸君も御覽の通り浦島家の横暴は傍若無人良多くも 皇室の藩屏でありながら陛下の赤子たる吾々人民を塵芥の如くに見做して居る、是れ宅平一人の私怨にあらず、町内一同の公憤である、これをしも恕すべくんば何をか恕すべからざるぢや、此故に其の此故を以て其の……」

宅平は長い年月の間使ひ馴れた漢語をすらくと言ひ得た我が辯舌に感動すると同時に次の言葉が出なくなつた。

「巧えもんだなあ」と三公は感歎した。

「爾とも此人はお前豆屋を廢しさへすれば大臣になれる人なんだよ、あゝ爾とも」

と豊公が言ふ。而して二人とも急に膝を掻き合はせた。

「かるが故に」と宅平は一段大きな聲で怒鳴た。「吾々は國家のために天誅を加へずんばあるべからずだ、敢て諸君の奮勵を望んで止まざる次第である」

一同は顔を見合はせて黙つた。

「什麼だ諸君の決心は」と宅平は四邊を見廻はす。

「賛成」と一人が言ふ。

「賛成」と五六人が應ずる。

「だけれどもお前、何の事だか解つたか」と豊公が三公に言ふ。

「解らなくつてさ、筆棒え、賛成は賛成だよ、恚ういふ席ちや何でも賛成と言へば可いんだよ」

「爾か、ちや俺も賛成だ」

折しも霹靂の如き音が地下に轟ろき渡ると、床と言はず壁と言はず室内のあらゆる物が地震の如く搖ぎ出した。

四

「よろしい」と宅平は老將の如く微笑した。

「年度の事は華族が勝つか貧乏人が勝つか、生命賭の勝負だ、什麼事があつてもお前達には迷惑は掛けない、罷り間違つたら子爵と宅平の首の遣り取りだ、解屍人は俺だぞ、可いか解つたか」

「虎さんに知らせなきやなるまい」と一人が言ふ。

宅平は静に頭を掉た。「あれは未だく世の中の利益になる仕事をする奴だ、俺達とは異ふから此那連累を食はしちや不可い」

一座は森と静まつた。トロツコが間断なしに壁を動かして床下を過ぎる。

「何時やつつけやうか」

「是から直ぐだ」

「直ぐに？」

「爾だ」

宅平は神棚から白鞘の短刀を取出して閃りと引抜き刃を懐に収めた。手配の順序は決められた、トロツコを破壊する者、石礫を降らすもの、敵の人足共を追拂ふ者。而して混戦の間を潜つて幕々地に假橋を上り行くのは宅平で其の爾添は三公と豊公が選まれた。

其れは午前の十時頃で、十二時の晝飯時には準備全く整うた。手ん手に得物

くを提げて井戸端に集まつた。

二三人は晝飯の隙を覗がつて鶴嘴、鋸、鐵挺を盗む、そらツといふ間もなくトロツコの破壊に取掛つた。

「何をしやがるんだい」

「何を」

叫聲罵聲一時に起ると、普請小屋に辨當半の人夫共一度に起上がつて馳せ行かうとする途端に、大石小石が雨の如く降て來た。

見るく浦島家の人夫共は片つ端から薙ぎ倒された。

「皆な來い」

百名にも餘る労働者と二十人足らずの労働者の格闘が初まつた。棍棒と棍棒、拳と拳、叫聲喊聲、唸る音、倒るゝ音、多數を待みの浦島家と公憤に勢ひ立つ宅平黨、人間の惨忍な性質が遺憾なく發揮せられて、只だ百幾十頭の動物が鬣を逆